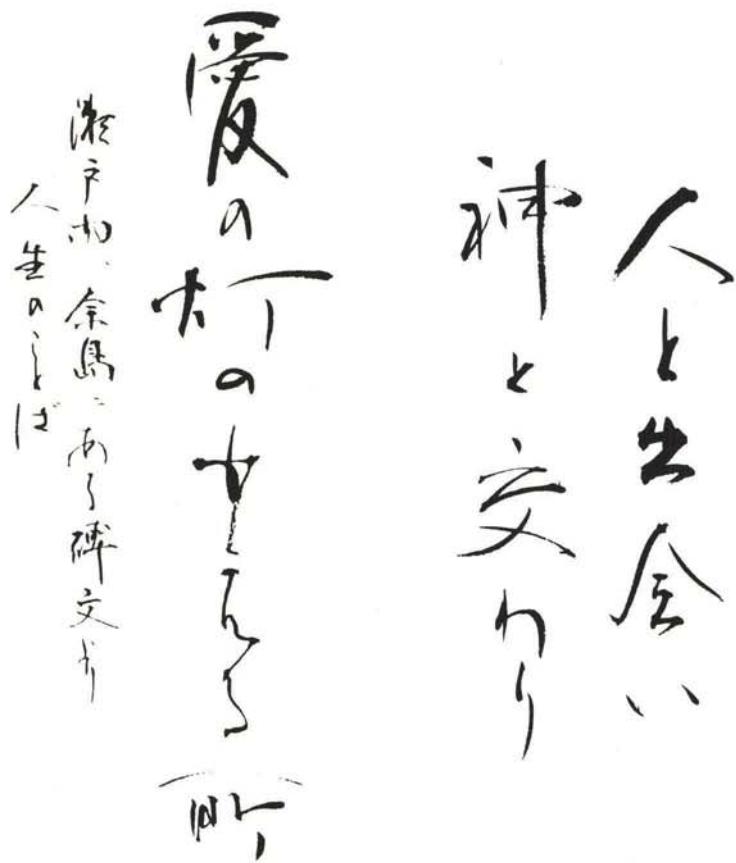


R.I第2680・2670地区

第14回RYLAセミナー報告



1992年4月2日～4月5日

— 1991～'92年 国際ロータリーのテーマ —

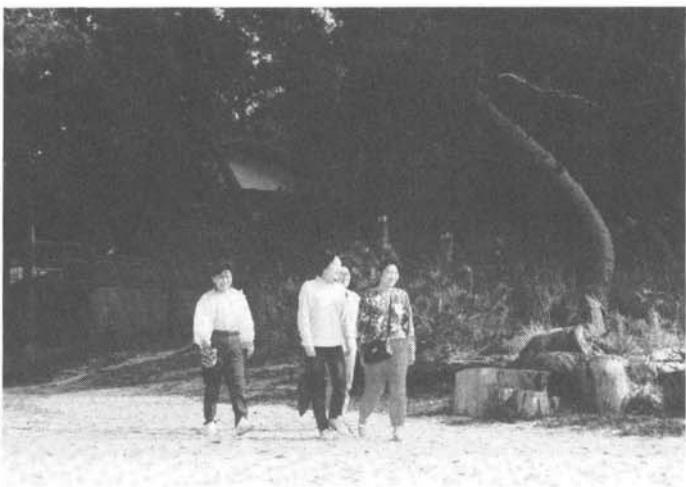
自分を 超えた 眼を

もくじ

1991～'92年度ライラを終えて	井 内 堯 治	1
ディーンとしてのメッセージ	菊 澤 建 明	3
詩	梶 浦 瞳 一	5
リーダーシップを持つあなたへ	平 地 保 治	6
セミナープログラム		7
講 演		10
日本人とは	黒 木 幹 夫	10
今を生きる	奈 良 毅	24
21世紀を担うものとして	今 井 鎮 雄	37
参加者感想文		51
A グループ		52
B グループ		64
C グループ		76
D グループ		86
参加会員名簿		98
あとがき	平 地 保 治	103

人と出あい
神と交わり
愛の火の
もえるところ





1991～'92年度ライラを終えて



国際ロータリー第2670地区ガバナー

井 内 堯 治

竹が割れた こらえにこらえて倒れた

しかし竹よ その時おまえが 共に苦しむ仲間達の背の雪を

払い落しながら倒れていったのを 私は見ていたよ

ほら倒れている おまえの上に

あんなに 沢山の仲間が 起き上っている。

懇意な障害者のお宅を訪ね、部屋のカレンダーの絵と詩を見て深い感動を覚えました。星野富弘作、作者の経歴を見て更に驚き早速彼の詩集を取り寄せた。

著者は群馬大学教育学部体育科を卒業、機械体操と登山を愛し、待望の体育教師として赴任後僅か2ヶ月で練習中不慮の事故で肩より下がすべて麻痺する死線をさまよう重度の傷害を乗り越え残っている僅かな機能から自己回生の道を「筆をくわえて綴った生命の記録」であり、自然の風物からこれらの純粋な人間愛が表現され恵まれた我々に感じとることの出来ない愛の深さを与えて下さいました。

1992年4月小豆島の余島YMCA研修センターでロータリー青少年奉仕活動のひとつRotary Youth Leadership Awards(ロータリー青少年指導者養成プログラム)、ロータリー用語で頭文字をとってRYLA(ライラ)は若い人の指導力と善良な市民の精神と資質を向上することを目的に毎年国際ロータリー第2680地区(兵庫県全域)と第2670地区(四国四県)共催で行われています。両地区から40名づつの受講生のために両地区的ロータリアンが14年間継続実施いたしております。一年間にわたり漸新

なプログラムを企画検討しロータリアンも共に奉仕による活動により、社会生活で得られない数々の感動とそして笑顔を見るときロータリアンの長い苦労も喜びに変わってゆきます。

もう一つ私の好きな彼の詩を紹介しましょう。

神様がたった一度だけ この腕を動かして下さるとしたら

母の肩を たたかせてもらおう

風に揺れる ペンペン草の実を見ていたら

そんな日が 本当に来るような気がした。

ライラで参加された皆さん、彼の回復不能の闘病生活の中で血のにじむような努力で生み出された詩と絵は嘗ってこれほど人間のいのちの尊厳さを私に与えてくれたものがあったでしょうか。ライラというご縁でこれから与えられた人生を大切にして体得した感動を、心の糧として精一杯努力して下さい。

ロータリークラブは職業の異なった人々が地域社会に国際友好と理解を深めるために個人が、クラブが、思いやりのある社会づくり、そして平和を目的に全世界に展開して友好の輪を広げております。いつの日か皆様にも参加していただきたいと思っております。

松尾芭蕉がその弟子に“故人の跡を求めず、故人の求めたるを求めよ”来るべき年、有為な若人にライラへ参加するようにすすめて下さい。

お元気でご活躍下さい。皆様のご多幸をお祈り申し上げます。

ディーンとしてのメッセージ



第十四回ライラ
ディーン

菊澤建明

ライラ受講生の皆様、各地にての活躍心よりお歓び申し上げます。ライラを受講されて何かお役に立っているでしょうか。私達は受講生の皆様方と共に過ごした四日間は一生掛け替えのない感動の日々と受け止めています。

第十四回ライラで始めての出会いを持った、理想的な自然環境の余島は桜の美しさ、海の雄大さ、鳥の鳴き声と共に深く思い出となっていることがあります。そして忘れられない心に焼き付いた思い出は何と云っても、愛媛大学の黒木教授、東京外大奈良教授、今井鎮雄先生、梶浦先生の感銘深い授業、そしてキャビンタイムでの夜を徹しての楽しい語らいはおそらく学校を卒業されて以来あまり経験の無い出来事であったと思います。

ライラそのもの全てが心に残る皆様方の思い出として事に当った時思い起こしていただけたらと思っています。

ディーンとして皆様が始めての出会いとは思えぬような楽しそうに語らい、共に勉学に励んでいる姿を拝見させていただき、一日一日友情の深まりと変化を頼もしく思うと共に、さすが各地域から選出された青少年リーダーの集まりあることを実感致しました。

人ととの出会いは不思議な縁と申しますが、地域社会に少年人材育成に身をもって貢献したいと願い、また実践されている皆様は、天地宇宙の法則に従って出会いの機会を得ることが出来、出会いによって友情が生まれるとも云われています。

私はディーンとして、皆様に如何に歓こんでいただけるか、また充分に満足していただけるか、そして精神的充実がはかれたか、新しい発見を得ることが出来たかに心を配りプログラミングを致しました。

地区ロータリー委員会の皆様と共にこのライラの目的、段取り、準備には時間をかけたつもりです。

自由、自主、自立を核として原理の探究を目的としていた事は実際に体験された皆様は実感として感じられたことだと思います。

それ故に、このライラは技術的向上を指導する目的ではなく、皆様に少しでも青少年指導者としての人格を更に大きく育成し、皆様がそれぞれの地域に帰られて後、その後の活動が青少年指導を通じ地域社会をより良い変化と改良に進まれることを信じています。

二十一世紀を荷う皆様方に私は大きな期待を持っています。ディーンとして皆様方と出会えた歓びは、

「人と出会い、神と交わり、愛の灯のともるところ」のあの美しい余島、桜が咲き、鳥が鳴き、風を渡る自然の木々のささやき、共に心に深く残っています。余島で生まれた友情を大切に大いに翔いていただけることを夢見ながら、皆様の健康を祈っています。

最後にこのライラに大いなる情熱をかたむけ、ご奉仕下さいましたスタッフの皆様、本当に有難うございました。

心よりお礼を申し上げます。

わしがやらねば誰がやる
今やらねば いつ出来る
一人では何も出来ないが一人が始め
なければ何も出来ない
その一人になろう
生きることは分かち合うこと貧しくとも
心豊かに
人には出来るだけのことをしよう
たった一度の人生だから
年々怠らず 善き友と交わり 神に従い
精進して自分を作つておこう
春風吹き来つたとき
春雨降り来つたとき
目を出すことも出来よう

顧問 梶 浦 瞳 一 (松山RC)

平櫛伝中氏、岩村 昇氏、坂村真民氏 3人の詩をロータリー的に編集をされた
ものです。



リーダーシップを持つあなたへ

いまや、世界が大きく変革し続けていることは、皆さまは感じ取られていることでしょう。これまで軍事力に頼って対立し合ってきた世界の国々が、もはやそれでは国の安全は保障されない、国の経済力を繁栄させるだけでなくお互い心の協力をし合わなければならぬ、という方向へ大きく変わろうとするのが今日の流れといえましょう。世界全体の流れが「戦争と革命」の時代から「平和と安定」の段階へ移りつつあります。国の体制は違っても、この流れに逆らう選択はもはや不可能になっている、と識者は指摘しております。そして、その転換を可能にするか否かの成否が、国と国、人と人が心から信頼し合える土台づくりができるかできないかにかかっている、と私は考えるのであります。

この世界は、互いに利害の異なるさまざまな国、さまざまな立場、さまざまな考えの人人が集まって構成されています。それを一つにまとめていくには、互いの相違点を大きく包みこみ、かかえられるリーダーシップを育み發揮しなければなりません。これこそライラセミナーに参加されたあなたの役割であり、そのためにロータリーはライラセミナーを行っているのであります。

ライラ委員会より一言

文責 平 地 保 治



セミナープログラム

	4月2日	4月3日	4月4日	4月5日
8		朝 食	朝 食	朝 食
9				
10		日本人とは 黒木幹夫 講 演	今を生きる 奈良毅 講 演	21世紀をになう ものとして 今井鎮雄
11				閉 校 式
12		昼 食	昼 食	昼 食
1				
2				
3				
4	開 校 式 オリエン テーション	レクレリエーション ヨット・テニス ソフトボール他		記念植樹 離 島
5			バズセッション	
6	パーティーオープニング 夕 食	夕 食	夕 食	
7				
8		キャンプ		
9	キャビンタイム	ファイヤー 親睦の夕		フォーラム
10				



ご指導いただいた
2680地区奥村ガバナー



参加ロータリアンの
ミーティング



お世話になった
深川バストガバナー
三木さん 嘉納さん



ロータリアン同志の友情

フォーラム
リーダー 深川パストガバナー
「青少年とは」

思い出深い時間であった

第14回 RYLAセミナー
92'4.2~4.5 YOSHIMA



第14回 RYLAセミナー
92'4.2~4.5 YOSHIMA



第14回 RYLA
92'4.2~4.5 YO



「歴史を読む」

日本人とは



愛媛大学助教授

黒木幹夫

おはようございます。皆さんのお顔を見廻しますと、さわやかな顔がたくさんです。眠そうな顔をしている人が何人かいて、すこし目覚めのためにショッキングなお話をしなければいけないのかな～と思っていました。私は今日「ホーホケキョ」で目が覚めました。今頭の中はとてもさわやかなのです。少しずつむつかしいお話を持ってゆきたいのですが、世間話程度の所から始めて少しむつかしい言葉を紹介して、言葉としては簡単なのですが深い意味を持っている言葉をいくつか、まず最初に列挙して結論めいたことを先にしたいと思います。

夕べおいしいものを食べて飲んでいい気持ちになって、部屋に戻ったところがラジオもない、何もすることがない、仕方なく考え方をしました。何もすることがない、何もしないということは実はとても愉快に思っています。何もすることがないから考え方をしていた、で今日何をお話するのかということを考えると同時に部屋の中で夕べ色々なことを感じました。感じたことを少し整理してお話すると「静かなところで、ぼくは一人なんだなー。」という事を実感しました。「あー一人で生きているんだなー。」という事。ふだんは私は大学で教えているものですから、いつも誰かが側にいます。いつも何かが前にあります。つまり雑音がありいろんな人の会話があって忙しいのですが夕べは一人でいるという事を実感しました。もう一つ時間の重みの様なものを夕べは感じることが出来ました。「今という時間の重みというのは、今という瞬間は一回しかないんだなー。」ということを実感しました。「今というのは一回きりなん

だなー。繰り返されないんだなー。昨日感じたことはもう繰り返されないんだなー。」と感じました。もう一つ感じたことがあります。物音一つしない、時折潮騒の音がきこえてきました。「自然のふところに抱かれているのだなー。」という事を実感しました。

なかなか現代社会の中で自然を感じるということは我々はないと思います。それを体験できたわけです。この三つの事を感じることが出来たということは大変大事なことで、こういう感じを持った夕べという時を体験させて下さったライラーセミナーことに感謝したいと思います。なぜかと言いますと、これは私の本音なのですが皆さんの前でお話できることをとてもうれしく思いますと、なかなか言えないわけです。なぜ言えないかと言いますと、人前でお話するのがあまり好きではないものですから「話をしてくれ」と言われると何か用事をでっちあげてお断わりし、人前で話をすることが嫌いな私が大学の教師をやっているわけです。つくづく感じることは「人生というのは思い通りに行かないなー。」「ふしぎだなー。」と、なかなか自分が計画したような人生というわけにはゆかないものですね。いかないという事を常々実感しています。実は人生というのは思い通りに行かないというのが本当の姿なのではないかと感じています。人生というものは、だからこうなんだという形ではなかなか納得出来ないものです。人の一生、人が生きているということは、だから何なんだという形では納得することがむつかしい。私自身自分の人生が納得できません。なぜ納得出来ないかというと、思い通りにいかないことが多いからということです。思い通りにいかないということは、だからこうなんだでは説明できない、だからこうなんだの反対ですね。反対を「にもかかわらず」と言います。人生は、だからこうなんだで起こることよりも、にもかかわらず起こることの方が多いんだということです。これに対してどういう感情をもつのかというと、実は我々は感動するわけですね。にもかかわらず起こることの例を一つだけあげてみます。人ととの出会いというのは、しばしば、だからこうなんだというレベルでは起こらないものです。誰かと出会う、出会いの体験は、にもかかわらずというレベルで出会いは起こっています。納得出来ないその人ととの出会いがその人の人生を変えていくことがあるし色々に人生が開けていくこともあるわけです。「にもかかわらず」これは大事な言葉です。人生はにもかかわら

ず起ることの方が多いということです。むしろ、皆さんがあたり前だと思っていること、常識だと思っていること、正しいと思っていることをくり返す様な形でお話をします。

本当に大事なことは何なのかという形でお話をしていきます。今、実は一つモデルを提供したわけです。我々はしばしばこれは、私自身もそうですが皆さんもそうだと思います。思い通りにいかないと誰かのせい、何かのせいにしたりする。実はふだん我々は思い通りにいかないということ、にもかかわらず起こることを、しばしば、だからこうなんだという物に重きをおいて、切り捨ててしまっています。にもかかわらずというのは、理由がないということです。理由がなく起こることを、切り捨てたり無視したりして、常識が常に納得のレベルで存在しているから納得できないものは切り捨てる、ということをしています。にもかかわらず起こることを無視することは、人生のチャンスを無視することにもつながっています。

話のテーマは「歴史を読む」という大きな枠組みの中で「日本人とは」これについてお話することです。こういう考え方があります。世界はいろんな意味で変動しています。歴史的な出来事が世界的なレベルで起こっています。世界は一つになりつつあると言ってもいい。こういう中で世界史的なレベルの中で物事が起こっていることで個別な日本人を問題にするということはある意味ではとてもナンセンスなことです。我々は世界人であり地球人である、という意味があります。これから先、人類の社会はよくわかりませんが私自身はあまり希望をいだいていません。これから先、人間というものは人間らしさをどんどん失っていく危険性があるかと思っています。地球というのは生命体である、地球というのは生きているのだ、人間は地球という生命体の癌細胞だ、という人がいます。自然環境をおかしている。自然体系をくずしている。地球の中で自分の首をしめるようなことを行っている。色々悲観的な意見がジャーナリズムで出てきている。人間らしさが失われている中で本当の人間らしさとは何かを我々は考えなければならないと思います。その際実は日本人は伝統的には人間らしさを本当の意味では考えて來たわけです。伝統的というのは明治以前迄のことです。明治になって西洋から色々の文物が入って來た。と同時に日本の伝統も失われてしまったわけです。生活様式が西洋的になってしまって物の考え方も西洋的になってしまい、

日本の伝統はどこかへ行ってしまいました。現代社会の中で見失ってしまった人間らしさを取り戻すには、日本の伝統をふり返ってみればよいわけです。これはとてもむつかしい。頭を相当にやわらかくしないと、伝統をふり返ることが出来ないわけです。結論めいたことを話しますと、人間らしさとは何かをわかりやすい言葉でいうと知恵ということです。これから将来人間らしさを失っていくと言うことは人間が知恵を失っていくということと同じなのです。知恵を失うのと反比例で人間の知識はどんどんふえて行きます。科学文化の発達、いろんな要因で色々なことを知ることが出来ます。知識と知恵というのは違ったレベルで存在しています。わかりやすい例でお話ししましょう。一流大学を出て一流企業に働いている人が幼い子を誘拐したりする、いたずらをしたりする。知識のある人がなぜそんなことをするのかというと知恵がないからです。では大企業のえらい人達が法律すれすれのところで法にひっかかるところで金もうけをする、何故そんなことをするのかというと知恵がない。ほんとに人間らしさが欠落してしまっているからだと思う。この知恵を伝統的に「魂」「大和魂」と言っていました。この言葉は第二次大戦中にイデオロギーとして利用されてしまった、その影が尾をひいています。

では知恵はどういう風に形成されていくか。古代伝統的に、知恵は納得では形成されないという風に考えられた。知恵は感動のレベルです。必ず起こることを受け止めるのが知恵です。納得できないことを切り捨てるのが我々の知識です。理由がなく起こすこと、例えば色々な人との出会いを受け止めることができるのは人間に知恵があるからです。いろんな形で、にもかかわらず起こることを受け止めていくことで知恵が養われていく。この感動は昔の日本人は「大和魂」とペアで使わされていましたが「物のあわれ」という言葉でした。「知恵」が大事だということが私の話の結論です。

もう少し具体的にいいますとこの知恵は最初に活かした四つの事とかかわってきます。何もしないという事、人間は一人なんだということ、今というものは一回しかないのだという事、今この出会いを大切にしなければならない。自然ということ、これらが知恵の具体的な事柄です。

身近な問題から入っていきます。現代社会はどういう社会か、から考えていきます。とりわけ現代社会の中で生きている我々自身はどういうものなのか。我々はどういう

時に自分の存在感を感じるのかという事から、存在感というのは「自分はああ生きているのだなあー。」という実感です。存在感は生の実感と置き代えることが出来ます。我々は「いつ」「どういう場合に存在感を感じているのか」。私は二つの条件を出せると思います。まず、最初は「何かをしているとき」漫然としているのではなく一生懸命やっているときーがんばって何かをしている時に感じることが出来ます。もう一つは誰かがそばにいることが存在感の基本だと思います。

一番目の問題は、時間の問題として考える事が出来ます。二番目の問題は社会の問題として分析をしていく事が出来ます。何故何かをがんばってするのだろうかと問い合わせ立ててみます。答えは一目瞭然良い結果ー成果ー利益を得るためです。何かをすると将来結果が得られることになります。時間の問題です。過去から未来に向かって流れる時間の問題です。何かをすると将来何かの結果が出ます。例えば受験勉強をする一大学に受かるまたは落ちるという様な、何かをするという事は時間の流れを予想しています。よい結果を得るためにには効率良く事を運んでいかなければならない。合理的に物事を処理していくないと良い結果は得られない。我々は今ここに生きている。結果を先取りしている、未来の問題がどこに入りこんでいるー未来のことが気になって仕方がない。

それは良い結果を期待するからです。現代社会に生きているわれわれに欠落しているものがあります。今私の話をきいている皆の頭を解剖するとしたら二つのことしか存在していないはずです。一つは将来に対する不安です。それは将来を先取りしてしまっているからです。もう一つはああすればよかった、こうすればよかったという過去への後悔、時間のレベルで考えると何かをがんばってする理由がはっきりしてきます。それは今が欠落しているからです。我々の頭の中は将来に対する不安=不安は期待でもあります。過去に対する後悔、時間の流れしか存在しないわけです。時間の流れは過去から未来へ向かって流れる時間です。これは時計で計れる時間の流れです。これをギリシャ語でクロノスといいます。現代社会に生きるわれわれにとっては、このクロノスがとても大事な時間です。実はもう一つ時間があるのです。それは我々が失ってしまった時間です。これは知恵にもかわる時間です。

我々が存在感を感じるのは、一つは何かをがんばってしている時、もう一つは誰か

がそばにいる時でした。我々は自分を大勢の中の一人としてしかとらえる事が出来ない。なかなか一人になって静かに物を考える時間をもてない。いつも誰かがそばにいる。大勢の中の一人。他の中の一人。だから誰かがそばにいないと自分の存在が確かめられないことになります。人間がたくさんいるから社会が存在するわけです。他の中の一人とは社会の中の一人と同じことです。社会と一人の人間の関係を考えてみます。大勢の中の一人とお話した事からわかる様に社会は全体で人間一人一人はその部分です。我々は社会の一部として存在しています。部分が存在する意味は常に全体が握っています。社会で存在する我々一人一人の人間の意義はこれ自体にはない。意義を握っているのは全体です。つまり社会という全体から我々一人一人は存在する意義を与えられるということになります。ここをはずれるとその人の存在の意味がなくなってしまいます。例をあげれば、仕事を持つというのは社会に所属するということです。社会の部分になることです。だからその人の存在は意味があります。仕事がなくなると例えば老人になる—仕事が出来なくなると、その存在意義はどこにもなくなってしまいます。だから現代社会では福祉がなされても老人問題は解決がもたらされないわけです。とても恐ろしい局面を持っているということです。

何かをがんばってするのは社会の部分である意味を確かめるためです。会社も社会、家族も社会です。我々はその一員であることを確認する。このためにがんばって何かをするしか、我々の存在を確かめられない。私自身は「がんばる」という言葉があまり好きではありません。もっと大事な事があるからです。がんばるだけが人間のすべてではないわけです。現代社会で流行しているものがあります。それはドリンク剤です。テレビのコマーシャルで「24時間がんばれますか」というのがあります。あれをみるとむかーとくるわけです。人間はなぜ24時間がんばらなければならないのか、死にます。だけどあのコマーシャルは現代社会に生きている人間の特徴をきっちりつかんでいます。がんばって何かをすることでしか存在の意味を確かめられない我々の姿を写し出しているからです。テレビのコマーシャルを作っている人は一番世の中をみているようです。何がはやるかわかるのです。現代社会の中で生きる我々の姿をあり様を話しました。

次にこのあり様を批判してみます。これはおかしいのだということ。今私が整理を

した存在感の問題、皆さんは当たり前だと思っているはずです。何かをがんばってすることは大事だ、誰かがそばにいるという事も大事だ。これは当たり前だと思っている。しかし、これは当たり前ではないのだというお話をします。「がんばるだけが能ではないんだ。」ということです。がんばるためにリラックスできなければいけないということです。がんばるだけでは過労死します。色々問題になっていますね。よい結果が出れば自分が充実します。生きがいがあると実感できます。しかし悪い結果が出れば存在感を失うということです。ところが人間の本来の意味での存在感はそんな弱いものではないのです。受験に失敗して自殺をしてしまう、仕事に行き詰まって蒸発してしまう、この世に存在する意味がないと考えるからです。でも人間はそんな弱いものではないのです。もう一つ困ることは、結果が重視されるのは良い結果が予想されればそれをする、悪い結果が予想されればそれをしないということになります。つまり損得勘定をしてしまうことです。つまり体験をあらかじめ取捨選択してしまうことです。何かをすることと、その結果との間には体験というプロセスがあります。結果を先取りしてしまって、体験のプロセスが抜け落ちてしまうことです。

出会いであれ、冒険であれ様々な体験はだからこうなるんだという形でなかなか納得できない、しばしば体験の中でにもかかわらずという事がおこります。体験は我々に感動をもたらしてくれます。感動は知恵を形成するきっかけになります。体験をするチャンスがどんどんなくなるということは知恵から遠ざかっていくことにもなるわけです。

一番目の悪い結果が出ると自分の存在感がなくなること—これはとてもおかしなことです。人間はそんな弱いものではないのだということです。

二番目の誰かがそばにいる時、人間は社会の一部であるという時、社会的存在—社会人であることを考えると、社会を成立させているのは人間だけではない。何か物がないと成り立たない、社会は資源がないといけない、一つは人間がいること、こういう場合の人間を人的資源という。しかし部分である限り、物的資源と同じレベルで存在している。社会全体を円で描くと、人間はその中の部分である。会社組織の中で考えると、その部分一人間の置き換えがきくということです。人間の置き換えがきく社会が現代の社会である。人間同志であればよいが、機械が効率よく仕事をすれば人間

を機械に置き換えられる。しかし人間は物と置き換える様なちっぽけなものではない、物に置き換える社会はおかしいと思います。現代社会に生きる我々は今より良い生き方を心がけて生きます。よりよい生き方は何かというと、社会的に貢献する生き方です。社会のためになる生き方です。よりよい生き方は社会のためになることがすべてではない。よいという字を善でおきかえます。現代社会の中に生きる我々がかかえている問題は近代以後からかかえたものです。歴史を大きくみてみると近代を境にしてあり様ががらっと変わってきています。

本来の人間のあり様は近代以後見失われてしまった。本来の人間のあり様は「人間らしさ」です。人間は社会の一部ではなくて、人間は一人一人だ。一人一人が全体的な存在なのです。この点が見失われてしまった。昔はこれを小宇宙＝ミクロコスモスといいます。宇宙としての価値は大きい宇宙と同じものです。今の社会で人が死ぬということは社会に欠員が出来ることでそのためにお葬式が行われる、欠員は補充がきます。小宇宙の考え方ではそうではない。人一人が死ぬことは大きな宇宙が一つ欠けるのと同じ損失なのです。重みを持っていたのです。全体は常に意味をもっています。つまり人間は存在することがそのまま意味だということです。生きていることがそのまま意味です。何をしなくても大きな意味を持っているのです。生きているだけで価値がある。その人が生きている間に何をするのかは、その次の問題なのです。ある事を通してする事を基礎づけていくべきです。簡単に言ってしまえば存在感がないのに何かをしても意味がないということです。あるということは、存在感のレベルの問題です。存在感があるということは何かをしようがしまいが意味がある。どんな結果がでようがその人の存在する意味は変わらないということです。例え失敗したところでその人の存在の意味は変わらないということです。例えば私がここでお話をしても疲れたからといって話を止めてしまうと皆さんはあっけにとられてしまって私の存在する意味は変わらないことです。人間一人一人はこういう大事な側面を持っていて、これが本来の人間の姿だし人間らしさです。人間一人一人は全体的存在であるというのは人間は部分的存在であるということと対立しています。部分的存在は社会のために生きていています。社会が全体だからです。自分以外のもののために生きていています。全体的存在ということはどういうことになるかというと自分は全体だから人間は一人一人

自分のためだけに生きているということになります。ただ自分のためだけに生きるというにはエゴイズムだという人がいるかもしれません。しかしあエゴイズム（利己主義）という言葉はこのレベルでは通用しない、我々一人一人の生き方にとって大切なのは自分のために生きることです。自分が存在することで意味があることわかってからのことです。この部分が実は近代欠落されてしまったわけです。この部分をはじめて多くの人がたくさんいるだろうと思います。一人間は生きているだけで価値がある－中世以前人間はこのレベルで考えられてきたわけです。「大和魂」とか「もののあわれ」この部分と実は、かかわった部分です。このレベルは「利他」と「利己」の対立として考えることが出来ます。人間にとって大事なのは本来ということでお話した部分です。人間がこの世に存在するだけで価値があるのだとすることがはっきり自覚出来ればがんばってあくせく何かをするということがなくなるはずです。リラックスした形でがんばることが出来るようになるはずです。誤解してほしくないのはこれはどちらがいいというレベルではないのです。現代社会に生きている以上がんばるということは大事です。社会のためになる生き方が出来ない人は困るわけです。ただがんばるだけがすべてではない。この部分をちゃんとおさえておかなくてはならない。この部分はリラックスの問題です。つまり人間は近代大きく変わっていましたわけです。歴史的なことを話してみます。

なぜ人間は変わってしまったのか、なぜ人間は人間らしさを見失ってしまったのか、近代になって人間はなぜ何かをする（doing）によってしか自分がこの世に存在することを基礎付けられなくなったのか。歴史的なことを一つだけあげると、これは資本主義の問題です。資本主義はプロテスタンティズムの問題です。近代になってはじめて労働重視の考え方方が出現したからです。プロテstanティズムとか資本主義がこの労働重視の考え方を出してきたのです。もう一つ近代科学の問題とかが色々あるのですが、きわめつけこの労働重視の考え方です、で人間は労働が一番大事というのは近代になって打ち出されてきた考えです。余暇の問題を考えてみます。労働の反対ですね、これは現代ではレジャーという言葉で言い現わされています。現代社会に於いて余暇が存在する理由は何かを考えてみます。人間は労働だけをしていると疲れてしまう。仕事がはかどらない、効力よく労働するためには休まなければいけない。現代の

我々の労働と余暇のとらえ方も、労働のための余暇となります。労働が目的で余暇はその手段でしかない、効率よく労働するための余暇は許される。余暇には許容範囲があります。余暇ばかりとっているとそれはサボリということになってしまいます。余暇とサボリは裏腹な問題です。中世以前の余暇と労働の関係は余暇のための労働です。余暇が目的で労働は手段でしかなかったということです。労働重視が打ち出された近代になって逆転したのです。「なまけ」という言葉があります。ところが中世以前では「なまけ」とは余暇を取らないこと、持てない人はなまけている人です。

もう一つ具体的な例を話しますと、よく使う言葉「仕事」は中世以前の世界には存在しなかったのです。では人間は中世まで仕事をしていなかったかというと仕事はしていたわけです。これをどういうことばで現わしていたかというと、「余暇がない」ということばで表していたわけです。余暇中心の時代だったわけです。それががらっと変わってしまったのです。現代我々が理解している労働のための余暇は時間の単位として存在しています。4時間働くと1時間休む、6日労働は1日休むというふうに時間の単位なのです。これを過ぎればさぼりになります。中世以前はスコレという言葉ですがスコレという言葉はスクールのもとになった言葉です。学校は余暇という言葉を本質に持っていますし、余暇は時間の単位ではなく心のゆとりを現わす言葉です。中世以前は神とふれ合うことが自然に出来ていた。神とふれ合うのは心にゆとりがないと出来なかったのです。今、教育の現場では教育にゆとりを持たせなければならないと討論されています。しかし言葉の法語源からいうと、ゆとりがなかったら教育でも何でもないのです。心のゆとりが何故時間の単位になってしまったのかというと、時間のあり様が変わってしまったわけです。

人類の歴史を理解するには、色々な方法があります。直感的に理解するいい方法は、時計の歴史を調べてみるという事です。まず、時を計る時、古代の人は自然現象を手がかりに計っていました。日時計、砂時計、水時計、いつも時間を気にしていたわけではなく、生活の一こまとして時間があった。自然現象からだんだん機械仕掛けになりました。ぜんまい仕掛けの時計です。ぜんまい時計からクォーツ時計というふうに精妙になってきました。時計が精密になるにつれて生活と時間の関係は逆転しました。時間にしばられた形でしか我々は生きられない、時間が社会のシステムになった。時

間の中に我々の生活がある一時の流れです。過去から未来に向かって流れる時間をクロノスといいます。ところが時間はもう一つあります。もう一つある時間を近代我々は見失ってしまった。二つの時間というのはすでにギリシャ人が考えたことで、ギリシャ神話の中で一つの時間をクロノス、もう一つの時間をカイロスといいます。クロノスとカイロスは神話の中で人間の形をとって現わされています。カイロスを頭の形で現わすと額がはげて後ろ髪が豊かです。カイロスは別の時間で未来から過去へ向かって流れる時間です。我々が想像出来ない時間です。カイロスは我々の前から来ます。但し、カイロスの頭の形は私の頭の形と逆です。カイロスは前髪がふさふさで後がつるつるです。カイロスが前から歩いて来た時にカイロスをつかまえようと思ったら、前髪をつかまえなければならない。過ぎ去ろうとする時につかまえようと思ってもすべてつかまえられない。人生のチャンスは前髪をつかまえなければならない。カイロスが近代は見失われてクロノスだけになってしまった。心のゆとりはカイロスのレベルでの心のゆとりということになります。人生のチャンスは一にもかかわらず一ということです。人ととの出会いもカイロスと同じで前髪をつかまえなければならない。理由がなく起こることほど大事な事はない。にもかかわらず起る事ほど大事なことはない。人間の存在感を基礎づけるものです。カイロスをどう受け止めができるかは知恵の問題です。過去から未来の流れの中に生きている我々は未来の事が気になって仕方がない。過去のことが思い出されてしまうがない。何を見失っているかというと今を見失っているわけです。近代以後、労働重視の考え方が出て以来、人間はするという事にこだわれるようになった。労働を通してしか自分の存在を基礎づけられないようになってきた。今を忘れないようになってきたと言える。今の若者にとって一番トレンドィーな生き方は今を軽やかに生きていること。今が軽やかに問題なく過ぎ去ればよい。問題のあるとつまづいたり面白くない。今さえよければよいとか、今は軽やかに過ぎ去ればよいということは、今がどういうものか全然わかっていないと言えます。何故かというと、今という瞬間は決して軽やかに過ぎ去るものでもないし、何の問題もないというものではないからです。今という瞬間はとても重みのあるものです。この重みを実感しなければならない。何故重いのかというと、今はクロノスのレベルで過ぎ去る時間の一つではなくてこの今にカイロスが現れているから

です。今という瞬間は歴史の中で二度とくり返されない。今というのは長い歴史の中で一回性のものです。一瞬一瞬を大事な形で生きていかなければいけない、ということです。今を軽やかに生きる等ということは人間らしさとは程遠い生き方になってしまいます。

最初に書いた事「魂」ということで少し考えてみます。

「大和魂」とはどういうことかというと現代の我々が忘れているというレベルで話したことがすべてあてはまることです。時間の問題であれ、カイロスの問題であれ人は全体的存在であるとお話をしたことがすべてあてはまるものです。現代の我々からでは程遠いものです。で魂は知恵の本体になるものです。これは知識ということとは全く違います。知恵と知識が全くちがうということは、すでに日本人が古代からすでにはっきりさせてきたことです。現代の我々は知恵と知識を区別できないし、中には混同している人があります。納得と感動というレベルに置き換えて下さっても結構です。感動を得るには、物のあわれを知らなければいけない。物のあわれを知るということは、色々なことを体験して感動するということです。知識と才（ざえ）のレベルになると色々なことが当たり前になってしまいます。当たり前になってしまふと我々は感動を失います。何故人間が生きていることが当たり前になるのかというと、大勢の中の一人ということで皆が生きているからです。一人一人が生きていることは当たり前でも何でもない人間が一人生きているということは、これはとても驚くべきことです。皆が生きているから自分も生きているのではなくて、自分は自分のために生きています。このレベルをとらえるのが魂です。生きているのはそれ自体が感動です。何故感動なのかというと、一人一人は生きていること、それだけで意味をもっているからです。

魂のレベルにかかわるからです。魂と才（ざえ）という対立の中で人間とはどうあるべきかということを日本人は伝統の問題として考えてきた。しかし明治以後、近代ヨーロッパの影響をうけて、日本人は上のレベルを見失ってきたわけです。上のレベルを見失って生きることが当たり前になって、何かをすることによってしか自分がこの世に生きている意味をみつけられなくなった。とりわけ日本人はがんばることが好きです。根性が好きですね。がんばろうということは、それなりに大事なことです。

だけど、それだけではいけない。リラックス・心のゆとりが必要です。心にゆとりがなければがんばることの意味がなくなることです。

日本人は西洋の影響をうけて自我の形成をいろいろやってきた。自我の形成だけでよいのかという問題がいろいろな所で提起されています。もう一つ大事なことが欠けているのではないか。魂—Soul-making、魂の養成です。今という一回性をちゃんと感じるとか、人間が生きているということに意味があると実感するとか自然のふところに抱かれている=自然と共存できるということ等、色々なことが含まれているわけですが、Soul-makingは実は、日本人が昔からやってきたことです。自我の形成よりも重要だと考えてきたことです。今日お話した知恵とか人間らしさとかかわってくることです。

人類の歴史はだんだん人間らしさを失ってきました。人間らしさを取りもどす方法がいくつかあります。そのうちの一つが日本人が考えてきた伝統を見直すということです。例えば、大和魂とはどういうことか見直してみることです。何もしないということは大きな意味をもっているということをお話しました。ぼけっとしているのではなくて深い意味をもっています。何故かというと、あるという事が大事だと気付くには、我々はするということを小さく小さくしていかなければならないからです。することを否定することだからです。夕べ実は何もしないで今話していることを実感できたら、最初に感謝をのべたわけです。するということを小さく小さくしていくと、あるということが如何に大事かみえてきます。あることが本当に大事だということはがんばっているだけでは永久にわかりません。これを示している童話があります。

「ドリトル先生」というお話があります。ドリトル先生は英語でいうと、do-littleです。doを否定するということです。童話の中でドリトル先生はヤブ医者です。大人からは馬鹿にされているわけですね。だけど一つ才能があります。それは動物の言葉を理解することが出来る。これは、あくまでも例えであって自然と共存することが出来る。ということです。現代の我々に一番必要なのは、自然を人間の都合のよいように変えていくことではなくて、自然との共存が課題として認識しなければいけない。実はドリトル先生の何もしないということは大きな意味をもっています。まだ読んでいない人は読んで下さい。何もしないということが如何に大事かがわかります。あの

東洋の宗教は、それを「無意」という言葉で現わしてきたわけです。

何もしないという事は現代の我々の価値感からすると常識だと思っていることからすると、何だばけっとしているだけじゃないかということになりますが、頭をやわらかくして本来の人間性から考えると大きな意味をもっているということが見えてきます。つまり知恵の問題です。皆さんのお顔をみながらお話をしたのですが、どうか皆さんで吸収できるところは吸収して下さい。ありがとうございました。

ざえ【才】

(ザイの転) ①学問。特に漢学。また、その学識。源帚木「一の際（きわ）なまなまの博士」②芸術や芸能の技倆。源絵合「琴（きん）彈かせ給ふことなむ一の一にて」③「ざえのおのこ」の略。宇津保藏開下「神楽…ども声よろしからんなど選びて」

「現代を生きる」 今を生きる



東京外国语大学教授

奈 良 毅

人間は、過去・現在・未来という時間の流れと、「ここ」や「あそこ」という空間の中に生きている。

そしてこれらの時間的・空間的等、時を超越できる心と、それらの制約を決して超えられない身とを同時に備えた複合体である。

人間が、真理を求め、幸福な生き方を会得するには、心と身という二律背反的な特性を活用し、因果律、靈主体従を学び、奉仕と祈りを実戦することにある。最初一つのメッセージをお送りしようと思います。私の編集した音楽のメロディーをおきかせします。その中からそのメロディーが皆さんに何を与えかけているか聞きとっていただきたいものです。かるく目をつむってメロディーを聞いて下さい。一音楽流れる—どういうメッセージを受け取られましたか。

何となく気持がふわっとした感情がでてくるのではないかと思います。心がなごむという方が多いですね。我々はいつも、そういう気持で一生を過ごせればこんな幸せなことはないと思います。たぶん皆さんは心の奥でそういう状態でいたい—平和であってほしいと思っているのではないかと思います。音楽がなくても普通の仕事をしたり、生活している時にも、常にそういう気持になるなればこんなすばらしいことはないと思います。では、どうしたら常にそういう気持でいられるか。そのためにいろいろな人がその方法について述べておられます。皆さん自身もお考えがあるだろうと思います。これをやれば必ずこうなれるという方法はないと思います。しかし、こうすれば

絶対ならないという方法もないと思います。つまり一人一人違うだろうと思います。何十億の人がいれば当然一人一人違います。いろいろの人々の意見・方法を勉強することは意義はあると思います。それをそのまままねをしてもその人に最上であるはずはない。やはり、その上に自分で工夫していったら自分に一番ふさわしい方法を見出すことができる。そのために我々はこの場にいるわけですね。

一番大事なことは幸福な状態になるために真理を知るということ。本当のことは何かというのを知ることです。特に業者の使命は何かというと真理を探求することにあるといわれています。本当のことは何かを知ることが生活の基本でなければいけない。それに対するヒントをいくつかさしあげてみたいと思います。

インドではよく存否を使う方法として先生が生徒に教える方法があるのです。ある人が山の中を歩いていて珍しい動物をみかけた。動物は茶色をしていた。それをみて帰ってきた弟子が先生に「今日こんな珍しい形をした動物をみかけました。茶色をしています。」といいました。すると別の弟子が「私も珍しい動物をみたい。」と山の中に入って行った。しばらくして帰ってきて「確かに同じ形の動物はいました。しかし茶色ではありませんでした。緑色でした。」と言った。第一番目の弟子は「私がみた時は茶色だった。あなたの見間違いだろう。」といって議論がはじまった。先生にはそれがカメレオンとすぐわかった。「きみたちどちらも間違っていない。しかし一部しかみていない。茶色だというのも本当だし、緑色だというのも本当だ。どちらも本当だから喧嘩する必要はない。カメレオンは木にとまった時は茶色になるし葉にとまった時は緑色になる。環境によって変える性質のものである。」と言った。

世の中のことを考えてみると、学問の世界でも宗教の世界でもそういうことは多いのでして、2500年前に生まれたお釈迦さまは色々な教えを説きました。500年後、イエスという人がユダヤ人の中から出て教えを説きました。現在、お釈迦さまの教えを信ずる人、イエスキリストの教えを信ずる人がたくさんいますが片方はお釈迦さまの教えが真理であるといい片方はイエスさまの教えが真理であるという。違いがある時片方が本当であれば片方は本当でないという事になりますので、普通の人はどちらかが間違っていると考える。相手を批判して自分が正しいと言いはり、そこに意見のくい違いだけが残る。それが信念と結びつくと厄介なことになる。神や仏を信ずれば

信する程、争いが深刻なものになる。やがて宗教戦争のようなものまで引き起こしていきます。しかし、先程のカメレオンの話でおわかりの様に2500年前インドという場所で説かれた教えはその時にふさわしい形で説かれています。また500年後中近東で説かれた教えは、その時、その場にふさわしい形で説かれている。どちらも正しい。どちらも正しいけれど真理の一部を説いているに過ぎない。

目の見えない方が何人かありました。はじめて象という物にさわったお話はよくきかれていると思います。最初の人は鼻の部分にさわり「とても長くて大きい動物だ。」といい、二番目の人耳にさわり「平べったい物が二枚もある。」、三番目の人確かにいってしっぽにさわった、すると「細くて紐の様な物だ。二人とも違う。」といった四番目的人足にさわり「丸太のような物だ三人とも違う。」といいはった。この様に一人一人自分が見たものが唯一の真理のように思ってしまう。この話は一般には、目の見えない人の失敗例としてひっぱり出されるようですが、私はそうは思いません。四人共正しいことを言っている。一部分について正しいことを言っているのは認めてやらなければいけない。しかし、それだけがすべてであると思うところに間違いや争いが出てくる。ですから真理というのは、部分部分の正しさではとらえられない。全体をみて真理をつかむことが大事なところである。

科学者にしろ、宗教家にしろ、自分の知った内容、悟った内容を自信をもって、これが真理であるという言い方をします。時代によって別のものであることが分かることもある。その時点に於いては真理の一部分であると思わなければなりませんが、それがすべてではない、という風にうけとる心構えを常に持ち続ける必要があると思います。

よく科学の進歩と共に物の見方考え方方が変わる。すると古いものがすべて無駄であるように思いがちです。例えば極端な例が、昔は太陽が東から出て西に入る。太陽が地球の廻りを廻っていると考えていた。科学者も考えていた。キリスト教界でもそうであった。コペルニクスという科学者が出てきて「太陽が廻っていたのではなくて地球が廻っている。」という考えを出しました。皆さんはどちらが本当だと思っていると思いますか、皆さん自身地球が太陽を廻る姿をみたことがありますか。誰もいないでしょう。人が言っているからそう信じているだけでしょう。そうすればそれ以

前の人達は自分の経験上、太陽が地球を廻っていると考える方が自然なのではないでしょうか。

私はどちらも正しいと思うのです。太陽が地球を廻るのも正しいし、地球が自転しているのも正しい。ただどこに視点を合わせて物をみているか、その違いによって見方が違うだけのことです。我々に真理がわかるためには両方の立場がわからなければならない。時間的な違いも空間的な違いも視点の違いもそうです。自分の経験が大事なことも確かに自分の思う通りに感じ、思う通りに結論を出すことも必要です。しかしそれ以外が全部間違いであると思うのは危険です。

本当の事はすべてが可能なのです。断定してこれが真理であると言っても、それは真理の一部なのです。今私たちが昼と感じられるのは夜というものがあるからです。夜がなかったら、昼と夜の感覚はないはずです。物にはすべて二面・三面があり、どんなに矛盾すること反対することがあっても、両方とも価値があるのだという見方、これが真理をみる基本的態度となります。ですから世の中に57億の人間がいますけれど一人一人形は違っていると同じ様に言葉も考え方も少しずつ違っています。しかし全部真理の部分に触れているのです。ですから自分と違う考えを出されてもそれは真理の一部分に触れているに違いないと思う心構えを持ってほしいのです。

あえて自分の考え方を否定する必要はないのです。自分の考えも大事にするし、人の考えも大事にする。そういう自分になってほしい。いずれの世界にも派閥が多くさんあります。それは結局、真理をつかむ物の見方が確立していないからと思うのです。

簡単な例をあげますと、コップに水が半分入っているとします。「半分入っている」という言い方と「半分しか入っていない」という言い方。半分入っていると言う人は水の部分を見、半分しか入っていないと言う人は空間の部分をみているのです。

世の中を平和にし、楽しく過ごそうとするならばまず自分の中に真理とは何かという事を擱む目というものを作り上げないと幸福になれないし世の中を緩やかにしていけない。

真理というものはそういうふうに多面性を持っている。自分の見方が唯一でないし、他の見方もあるに違いないと思うことが真理を知る基本的態度である。さてこの真理の擱み方が分かったと仮にしましょう。

次に大事なことは何か、水の例でも触れました。視点を知るということだけでは幸福に結びつきません。幸福に結びつける鍵はもっています。鍵で幸福の館を開けなければなりません。開けるという動作が解釈なのです。真実というものをどう解釈してゆくか。世の中を楽観的に見る人は「水が半分ある」と解釈し、悲観的に見る人は「もう半分しかない」と解釈するのです。どちらも可能なのです。人間が死ぬというのは非常に悲しいことです。死ぬという事実は避けられないものです。例外は一人としてありません。ただその人の寿命が長いか短いかがあります。一人としていつまでも生きていることは出来ない。これは世の中の法則です。これは事実です。やがて人間の体が衰え、息をひきとる。この事実をどう解釈するか、どんな状況でもその解釈によって世の中が楽しいものになったり、暗いものになったりします。

話を戻しまして、例えば生まれたときに我々は手足目鼻がちゃんと使える状態で生まれてきます。ところが世の中には、目が見えないとか、耳が聞こえないとかいう形で生まれてくる人もいます。生まれた時に遺伝子の関係でしょう。筋ジストロフィーの人とか、小児麻痺の人、生まれた時から動けない状態で一生終わる人もいます。あるいは途中で病気あるいは事故、怪我等で不自由な身になる人もおります。その中で一人の人のお話をします。

私は最近福島さんという大学生に会いました。この人は目も見えないし、耳も聞こえない人です。私の生徒を通じて知り合いとなり用事があってお会いすることになったのですが「何月何日から何日の間にお目にかかりたい。」という手紙を出しましたら、彼から電話がかかって参りました。「どこで会いましょうか。」と言ったら「新宿の南口で待っていますからそこへお出下さい。」ということでした。電話の応答で少しづつ時間がかかるのです。それはその人が耳がきこえませんから、わきに同僚がいて、その人は目がみえないのですがその人が聞いて指で伝えるのです。そのメッセージを聞いて口で声を出して話すので2・3秒間かかるのです。そして新宿南口で会いました。「ここはちょっとうるさいですから近くの喫茶店まで行きましょう。」と歩きはじめると、向こうはうるさい等という音は分からぬわけです。いきなり話しかけてくるのです。私は「え？え？」と何回も聞いて耳の聞こえるというは何と不自由なことかと感じました。おそらく目の見えない方は昼であろうが夜であろうが全然

関係なしに歩いていけると思うのです。我々の方が明かりがないと自由な行動ができません。視点をえますと、どちらが便利なのかわからんね。どういう立場に立とうともその場で便利なことがあるはずです。だから、我々はそういう人に同情する必要はないのです。我々以上のものがある面では持っている。その時に通訳を通じて二時間程話しました。その人は英語もできるのです。外国人とアシスタントを通じて話をすることができるのです。

もう一人有名な方で中村久子さんといいます。もう亡くなりましたが、三才の時に、熱病にかかり急性脱疽病にかかり手と足首が紫色になってきて、二三日そういう状態が続いて両手両足の痛みが激しくなるばかりでした。そうなって一番びっくりしたのは両親であった。お父さんは何とかしてやりたいと思って色々医師にあたったが、だめで、今度は宗教団体にいって祈祷をした。あらゆることをするが結局は効果なしで両手両足がもげてしまったのです。時間とともに痛みはなくなるが全然動けなくなつた。そういう風にして成長してゆくわけですが、非常に頭がよかったです。おばあさんが物語を語ってきかせますと、すぐ覚えてしまう。学校にいきたくてしょうがない。やがて小学校に入る年になります。昔のことですから、家族にそういう子がいると親戚の者はいやがるのですが、お父さんは、どこへでも連れていってあげたようです。お祭りとか、近所で珍しいことがある時等。親戚の人はいやがり、娘の結婚にさしつかえる等と非難するがお父さんは「私は違う。私はこの子のためにしたいと思ったら何でもしてやりたい。」と言ってどこへでも連れていった。お父さんは将来のことを考えいろいろした。ある日数日の間にお父さんが亡くなってしまう。今度おばあさんとお母さんになつてしまふがお母さんも一生懸命内職をして養っていくのですが、どうしても一人ではむつかしいので再婚する。再婚先にも二人子供がいて、いじめられるが、お母さんは厳しい人だったので、又将来いつまでも私に頼っているわけにもいかない、一人で生きることを学ばせなければいけないという考え方で自分がしている着物を縫う内職を手伝わせた。学校を出たばかりの娘が出来ないといって泣くと「やればできるんです。」といって叩いた。やらない限りご飯を食べさせてもらえない。その内腕のつけ根に長着をはさんで針と糸を口で持って、舌をつかって針の穴に糸を通す練習をした。やっと出来るようになり一針一針あごを使って縫う練習

はなみたいていの苦労ではなかったと思う。昔は和服を縫えない一人前の女性として扱われなかつたので、友達の卒業のお祝いに着物を一枚縫うのです。残念ながら口を使うので涎が就いてしまう。友達はもらったけれどきたないといって着られなかつた。それがものすごくショックであった。普通の人だったら泣き崩れるかもしれません、「よし絶対涎をつけないで作ろう。」と何年間も努力するのです。それからは人よりも早く人よりも上手に縫えるようになったのです。だんだん大きくなり独り立ちをさせたいとお母さんも考える。最初考えたのは見せ物小屋に出るのです。昔はお祭等の場で着物を縫ってみせるのです。見せ物小屋で書道を教える大家と知り合う。そして口で筆をくわえて書く練習をする。そうして非常に有名にあり「だるま大師」という名前でよばれる書家になっていった。お母さんもなくなりおばあさんもなくなり本当に一人でやっていかなければならなくなつた。今度は、(面白いことに)結婚する相手ができたのです。最初の相手はなくなり、二番目もなくなり、三番目は生き別れるが教養を身につけた人としてだんだん有名になって、ヘレンケラーとも三回位会うのです。生活の基盤も出来、子供も出来るという環境で普通以上の生活が出来るようになったのです。いつも心の中は平安ではなかった。母親に対する恨みもまだありました。それから他の人に負けないという反発心のようなものがあって、心の緩やかに楽しく生きるということは出来なかつた。ある日たまたま座古愛子という人の話を聞くわけです。その人は生まれつき体が動けなくて寝たきりで40年間動けなくて大学の生協で働いておられる人です。その人の顔が神神しく輝いてみえた。私は手足はなくてもおぶってどこでも連れていってもらえる。しかし、この人はそこにしかおれないのにどうしてこんなに満ち足りた美しい顔をしているのだろう。是非この人にお会いしたいと思うのです。お会いして、その人の生き方、物の考え方を聞いて本当に感激して、自分の今まで人を恨み、世を恨んでいた生き方を恥ずかしく思つて、自分は一生懸命生きているけども廻りの人に生かされてきたのだなーということを悟るのです。それから全く、生活の仕方は変わっていませんが、心の中が変わつてしまつたんですね。今まで意地だけでやってきたという思いがあるのですが、それからは全て自分の環境がありがたいと思えるようになつたのです。詩をみると、私には「お父さん」というと「おい」といってくれる人がいる。「～ちゃん」というと「は

い」といってくれる。着物を縫う時は両方はさめる腕がある。字を書く口もある。何と私は恵まれているのだろう。何でもある。そういうような詩を一つ書いているのです。私がもし自分で歩いたり、手足があつたりしたら、おそらくろくな人間になつていなかつたかもしれない。悪いことをしたかも、人を騙したかもしれない。しかし自分ではどうにもならない体であるから、人の情、愛情に縋つてしか生きられない。結局自分は自分で生きているのではなくて、皆の温かい思いやりによって生かされていることが分かるようになったのである。実にこれはありがたいことだ。普通の人ならこういう状態になると両親を恨んだり神仏を恨むことが多いのですが、この人は逆にこの状態があったからこそ、私は幸せな人間になれたと思っておられる。同じ状態でもどういう心構えで解釈するか、捕らえるかによって、その人の気持が幸福を感じるか不幸を感じるか決まるのです。

ですから物事の真理・本当の姿というものを捕らえる。その次に大事なことは、捕らえた真実をどういう風に解釈するか、常に前向きにありがたいことをして捕らえるかどうかそれはどちらにも取る可能性がある。しかし、どちらに取つたらよいかは本人が判断するのです。

また、恋人がいたとします。恋人がある時去つたとします。その時悲しいと思うのは現実の状態です。悲しいと感じるか、またもっとすばらしい人と会えるチャンスが生まれたと感じるか、気持の持ちようで変わるのであります。自分の力で選択できるはずです。そういう気持を常に持ち続けることが大事であると思います。常に変えられるものと変えられないものと二つある。皆さんがある両親の間に生まれた。どういう家庭で生まれたか、あるいは、男に生まれたか、女に生まれたか、あるいは、どういう性質に生まれたか、どういう顔つきに生まれたか、これが与えられた条件なのです。変えようと思っても変えられないものです。これは事実なのです。この事実をどう自分で受け止めてゆくか。

科学の法則はいつでもどこでもだれにでも平等に働く。しかし最終的にたつた一つの法則に集結されると思うのです。それは仏教の立場でいいますと因果律という問題です。それは物理学の言葉でいいますと、原因と結果のことです。何かの現像が出るということは何かの原因がある。全く偶然に出るということはない。そうすると人間

がまだ生まれて何もしない時に、すでにそういう差別をもって生まれるといったしますと一体どこに原因があるかというと、これは両親の遺伝子によって決められると考えられるかも知れませんが、結局最終的に何か原因があるから、皆さんがこういう状態でいらっしゃる。そういう風に考えていくと、今だと分かりますね、皆さん20才か30才でしょう。生まれてから20年・30年してきたことの積重ねが皆さんを作り上げている。結果としてでている。ところが生まれた瞬間というのは何もしてないですね。何もしてないのにそういう繋がりを持っているのはどうしてか、生まれる前に原因があると考えざるを得ないですね。生まれる前はどういう存在でどういう原因を作ったのかまで考えないと法則の一般性は成立しなくなる。それを延長していくと、我々一生80年あるいは70年いろいろな原因つくって、この世を去ります。その結果がでます。その先にうけ皿がある。そこまで考えないと科学的にも宗教的にも法則はなりたなくなります。実は我々は生まれる前にも存在していた。死んでからも存在する自分を考えませんと、この法則を成立させることは出来ないことになります。では、生まれる前の自分と、その後の自分とはどういうものなのか。結局、自分とは一体何物かということですね。我々は普通肉体を持ったものを自分と言っているわけですが、しかし肉体がイコール自分なのかというと必ずしもそうではない。たとえ、中村さんの様に両手両足がなくなても自分というものがなくなるわけではない。肉体を動かし、心を動かしている自分というものがまずあって、それが肉体を持とうと持つまいと自分というものが存在すると考えないと、世の中の現像は説明できなくなってしまいます。では科学的にはどうやって確かめるか。それは、二つの方法があります。

一つは、皆さんが地球が動くのを見たことないのに、それを信じている。それはどういうことかというと、少なくとも科学者が計算をし、そして最近は地球の外に飛び出て実際に観測した少数の人の言葉を信じているのです。だからたぶん地球が廻っているという事を疑いなく考えている。それと同じように、ある特殊な精神科学者がそういう実験をし、人間の自分の靈魂といつてもいいのですが、本当の自分というものが実際に存在するということを確かめた場合、それを科学者が同じように信ずるかどうかという問題。

もう一つは、自分自身で確かめる。おそらく科学がだんだん発展してゆきますとや

がて、それは物理学的に確かめる時代がやってくると思います。皆さんは、物理学化學を勉強されると、分子記号とか原子がどうのという話を聞きます。自分では實際見たことはないでしょうが理論上考える人が昔いて、最近の電子顕微鏡の発達によって、実際に確かめられるようになった結果、これが事実であることが認められるようになったのですね。

それと同じ様に科学が発達しますと、今は目に見えない現像として想像していたものが實際それが存在するということが確認されるようになる可能性がある。

しかし科学がどんなに進歩しても、それがすべて物理学的な手段によって明らかにされるということはあり得ない。また期待するのは不可能であることを申し上げておきたい。

(五年前の時も申し上げましたが) どうしてかというと、物質界というものは限界があるからです。精神界は無限大であります。人間は考古学であるとか、地球物理学であるとか、古代生物学であるとか、いろいろな学問の発達によって人間の過去あるいは地球の形成、もっとさかのぼって宇宙の形成過程まで、いろいろな研究をするようになっております。宇宙の観測が最近盛んになりました宇宙の創造についていろいろの意見が出されるようになりました。一番ポピュラーなのはビッグバン・シオリーといいまして、最初に宇宙の核のようなものがあり、大爆発し、それがどんどん宇宙の塵となり膨張していく、塵どうしが引力で固まって色々な形を作り星とか星雲となっていったという考えがあります。宇宙は膨張しつづけている。それを計算上で説明しようとしている人がいます。それが事実のように言われてきましたが、科学者がどうしても説明出来ないことがあります。一体誰がその核を作ったか、誰が爆発させたかです。誰かが何かの機会にやったか、形而上学的な説明にしかすぎない。しかし、ホーキンズという学者がこの人は寝たきりで指先だけを使って画面に支章を作つて発表していますね。この人は体が動けないために頭しか働けない。ものすごく頭のいい方のようですね。この人が最近、最初の核とか最初の爆発とかを考えなくても現在の宇宙は説明できると言い出した。つまり核というものを想定する必要はない。その考えを出したために奥さんからクリスチャンであったために離婚するはめになりました。それは「はじめはない」という考えですね。いつか出来たのではなくて最初か

らあったというのです。これも一つの考え方ですね。途中から魂が出来て爆発したのではなくて前からあったと考えるのであります。膨張はどうして起きるかというと、これは彼の説の弱いところでもあるのですが、やはり偶然ということを言つてゐます。

水槽の中に水を一杯いれます。中に酸素がありますから泡が出来ます。あることがきっかけで泡ぶくが一つ出る。しかし、まわりが真空に近い状態であれば泡ぶくはすごい勢いで出来ます。その様に我々が住んでゐる宇宙は唯一ではなくたくさんあるに違ひない。何かの切っ掛けで一つか二つ泡ぶくが出来て、それからものすごい勢いで泡ぶくが出来て現在のような宇宙になったと考えられる。ビッグバーン・シオリーとは違うのですが、どちらが正しいかは分かりませんが、これを確かめる時は永遠に来ないと思ひます。空の星を観測する時は宇宙線を観測することで星の存在・性質を確かめることができるように現在なっています。今から何億光年向こうにどういう星があるかがわかりますか。しかし、これは何を意味するかというと、光や宇宙線が来る迄は時間がかかります。一億光年というと一億年かかるって到達した距離のことですね。人はそこに星があると結論しているのです。しかし、一億年の間にこの星はなくなっているかもしれない。だから宇宙線を観測してもその星があるということにはならない。逆に何もないと思っている所に新しい星が誕生しているかもわからない。ですから宇宙の観測は宇宙の真の姿を伝えることにはならない。あくまでも現時点で観測されていたとは言えるが証明することはできない。ですから、物質界でどんなに科学の技術が発達しても真の姿というものは、これからはでてこない。自分の靈魂の存在についても同じことです。

結局そういう事実を通して、どうしたら真実の姿をつかむことができるかということになります。はっきりいってそれはあり得ません。若し、神様が存在して、その人が宇宙を作り宇宙を動かしていると仮定すると、科学では証明できなくても、その人に直接きけばいいわけですね。それ以外の方法はありません。もう一つの仮定は宇宙が偶然に出来上がっているだけだとすると、その両方の立場を選択するしかないのです。

私が皆さんに言いたいのは、どちらを選ぶのが幸せか毎日心おだやかに感謝して生きられるか。或いは楽しく生きるか、自分の心に正直にきいてみるしかない。自分自

身の問題である。どちらの仮定に立った方が自分にプラスであるかがわかるようになります。さっき言ったように真理のつかみ方、解釈の方法によって自分を幸せにさせるということが出来るのです。これで70~80%の問題は解決します。あくまでも個人の幸せの問題の話です。

私達は60億もの人の中に住んでいます。宇宙を考えたら無数の人間や生物や宇宙物に囲まれて生きている。それら全部の存在から何らかの恩恵を受けて生きているのです。自分一人で生きることはあり得ません。水を飲むにしてもご飯を食べるにしても、いまは分業の世ですし、天地自然の恵みの中に生きています。自分一人健康でも家族が皆健康でなければ色々不自由なことになりますし、それを広げてゆきますと、自分の社会・地球全部、或いは天地自然全てが生き生きとした生活ができない。自分の意識をここまで広げてゆきますと、自分のこと人のことの区別をせずに人の喜び他人の苦しみも自分の苦しみという意識状態になってきます。

天地自然というものは自分を出しきって報いを求めないということがわかります。太陽一つとってもすべての人に光を与えてくれる。相手を愛して報いを求めないと言えます。もし我々一人一人が自分のもっている知識力を人を幸せにするために使いきって、どう思われようと報いを求めない生き方が出来たとすると、天地自然と同じ状態になれたとすると、相手を愛する喜びが生まれます。生きている楽しみが保たれます。一瞬一瞬そういう気持で生きられるということは自分にとって一番幸せであると同時に宇宙というのも幸せになっていくということになります。今日の我々は過去からいろいろな経験と知恵を学びとり、将来のことを考えて目的に向かって希望を持って生きていくことも必要です。しかし、それにも増して重要なことは、現在この環境でこの時間で瞬間瞬間を過していくか。そこがもっと大事なのです。これから皆さんができるいう職業につかれましてもそれは問題ではない。自分がしたいと思うことをやればよいことでそれによって与えられた環境の中でこういう瞬間を過していけたら幸せになれると思います。

努力はするのだけれどもそうはなれないという人がいるかもしれない。そのために訓練が必要なのです。とにかく熱心にそれを求めつづけるということ。その結果、いつ得られるかは人によって違う。しかし、必ず会得できるのです。違いがあるとす

れば努力を途中で止めるか止めないかです。他の人が先につかみ自分が遅くてもあわてる必要はありません。我々の存在は未来永劫あると考えるとあわてる必要がなくなります。ただ問題は続けてさえおればいつか到達できる。世の中の不平不満、争いというものは、何から起こるかというと私は嫉妬心から起こると思います。何故嫉妬心ができるのかというと他人との比較からでてきます。しかし永遠の時間を考え、一人一人方法が違うのだということを認識すればそういう比較することの意味がなくなります。キリスト教の世界でもそうですがインドでは「罪」ということを言います。「罪」とか「穢」とかどこからでているのかを考えますと嫉妬心から出ていると思います。旧約聖書でアダムとイブの話が出てきます。神様は生命の木と知恵の木を天国に植えますが、それを食べてはいけないと言います。しかしサタンが出てきて知恵の実を食べたら神様と同じ知恵を持てるから食べなさいと誘惑される。その誘惑に負けてイブが知恵の木の実を食べてしまう。自分の罪に気がつく。イブはアダムにも食べさせ二人とも罪をおかしてしまう。サタンがなぜ誘惑したのかというと、サタンは天子であったが神は人間というものを創造した。それをより多く愛しているのではないかと嫉妬し人間を落とし入れ、エデンの園を追われる様にした。地上で人間が額に汗して働いていて自分の糧を得なければならない様になった。収穫祭の時に兄は自分の汗した穀物を捧げ、弟は自分が育てた小山羊を捧げた。神様が山羊の方をとったために兄は神が弟の方を愛していると嫉妬して弟を殺してしまう。神が何故穀物をとらないで樂をして育った山羊を取ったのであろう。そこには思い上がりがあったからではないだろうか。兄は自然の恵みに対する感謝よりも自分の労働のあとをみてほしいという気持があり弟は、私は何もせず神様が与えてくれた牧草を食べて育ててくれたという謙虚な気持を読み取られたからだと思うのです。寓話ですが天地自然の恵みに感謝出来ると自分も幸せになれると思うのです。ヒントとして私の物の考え方を話させていただきました。

「未来を見る」 21世紀を担うものとして



RI第2680地区パストガバナー

今 井 鎮 雄

この余島に来て、この食堂の前に「人と出会い、神と交わり愛の火のもえるところ」という碑があります。あれは実はこの私の創作であります。梶浦先生が、これは「ロータリーの精神といっしょだ」と言われ、それを使って下さいました。皆さんもこの余島に来て、はじめての人と出会って、そしていろんな事を語り合う場所であり、自然の美しい中で自分を越えたものとの交わりを考え、お互い同志が友情をはぐくむ場所として四日間過ごしていただいたことで、私のいいたい事の半分以上を示していることと思います。テーマは、若者達に過去のことについて考え、又現在の事について考え未来のこと目に向けてもらおう。二十一世紀を支える青年達としてどんな事を考えていかなければならないかを考えてもらおうということです。未来はなかなかむつかしいのですが、一緒に考えてもらうことにしました。

私は話の中にいくつかの最近の本を紹介します。いつかは読んでくれるだろう。なるべくはやく読んでもらいたいと思います。

不变の本もあります。「聖書」とか「般若教」とかありますが、私達の現代を分析する様な本は時代によってどんどん変わっていきますから、読んだことを早く身につけていってもらえたならありがたい。

フォーラムの話の中で「青少年とは」の概念が非常に曖昧であって、わからないとの事でしたが、私は今の子供は体が大きいが精神的にはなかなか乳離れがしない。中には結婚しても乳離れがしないという話が聞かれるのが今の現状なのです。

そういうことの意味で一つ本を紹介します。フィリッパレースという人の書いた「子供の誕生」という本があります。むつかしくて読みにくい本ですが、実はこのフィリッパレースという人はフランス人でありまして、皆の所に伝わってきました。したけれども1980年に松山さんが訳しまして、これが一つの契機となりました。

その本に何を書いてあるかは「子供というものが子供として人間世界に認知されたのは、そんなに古いことではない。勿論人類が生まれてから子供ははじめから350万年前からいるのですが、人間が文化を持つといってからはそんなに長いことではありません。

大体チグリスユーフラテス文化とか黄河流域の文化、例えば治北の故宮博物館に行きますと、一番最初の文化のところに仰韶文化^{ヤンシャオ}、半坡文化^{はんぱ}と書いています。これは黄河流域の文化ですがここから出た一番古い文化が6000年前だと思いますが、それがチグリスユーフラテス文化と同じ頃ですが、その頃ごく当たり前に丁度犬ころと同じように子供を連れて歩いていても、子供という意識はなかったのです。子供という意識が生まれたのは17世紀頃のヨーロッパ社会。

子供を自分達の後に続くものとして、その子供をどう育てたらよいかという子供を教育の対象とする考えが生まれて来たというのが、このフィリッパレースの「子供の誕生」に書いてある一つのポイントであります。6000年もの長い歴史の中で近々の300年程の中で子供というものを考え方の教育を考え、子供のあり方を考えてきたことになります。

今後アービントフラーという人のことを話します。アービントフラーは「第三の波」という本を書いています。1980年に書かれました。1970年に「フューチャーショック」という本を書きました。これは、世界中に大変大きな衝撃を与えました。1990年に「パワーシフト」という本を書きました。ところが「第三の波」という本が世界中で一つの問題を提起しました。その問題は先ほどの「子供の誕生」と同じようなことで私にとって大事な参考になりました。

1万年前から、人類という動物は住んでいるのですか、人間として文化を持って生活するようになってからは一万年前に一つの文明が私達の最初の波である。それは農耕文明による農耕社会の成立といえます。それまではあちこち移動し狩猟生活を

していた人間が同じ種をまいたら、そこから同じ麦が出て来るということを知りそれなら遠くまで行かなくても、そこで自分達が生活出来ることに気がつき定住してくるのです。この農耕社会が生まれてくれれば、当然その社会の中に一つの秩序が生まれてきます。

こうしてトフラーは第一の波というのは農耕文明というものであり、私達の社会を長い間支配してきました。ところが今でも、ラテンアメリカであるとか、アフリカであるとかアジア諸国では農耕社会が続いていることはご存じのことです。こうして恒時、子供達はどうしているかというと、お父さんやお母さんの働いている時は一緒に遊んでいる。そして、後をくっついてお父さんやお母さんがどうして生産物を得るのか、そしてその生産物がどうしたら皆によろこばれるのかを見て育っています。だから、そこでは勉強しなくとも、お父さんやお母さんから生活態度をみて育つことが子供の教育であった。そして村のおきてを守り村の秩序を守っていくことの習慣が出来てきます。そしてそこには、神様も生まれなまはげ等によって教えられ、あるいは農耕神一田の神文化－伝承の中で育っていきます。

ところがトフラーは300年程前、産業革命が起きた時から、私達の社会は産業社会という新しい社会に変わったといいます。人間が物を使って色々なものを作ることが出来るようになった。こうしてみると農耕している人の中から物を作る人が都市に集まって来る、こうして私達の産業社会が発展していきます。都市化が行われました。農耕家族の形態は変わって産業社会の都市が出来るとふるさとに家族をおいて移って来ますから、当然そこには核家族化がおこってきます。西洋社会は核家族であり、アジアは伝統的な大家族制であると言われています。社会構造の変化に伴い家族構造の変化がおこってきます。

ですからトフラー第一の波から第二の波の産業社会ではお父さんはどこで何をしているか分からない、だから次の時代をになう階層として子供達を教育しなければならなくなってきた。今私達がやっている教育百年－明治から続いて来たこの百年の教育はこれを西洋近代といいます。それにふさわしい教育が行われてきたのです。江戸時代50%の人は読み書き、ソロバンが出来た。それと同じ時代に、ロシアの識字率は17%くらいですから日本の方が3倍位の識字率をもったすばらしい国であったことは間

違いありません。よくドイツのロマンチック街道を旅行すると絵看板が出ています。あるいは帽子のかっこうと看板が出ていたりやかんがぶらさがった荒物屋さんがあります。日本から来た観光客はあかぬけしていると感心します。昔は字が読めませんから旅人に絵で示したのです。日本人は字が読めましたから「かもじ屋」とか字で示しました。私達は西洋近代化の中で子供を意識して、その産業社会の中でどんなすばらしい人間を作るかということが教育の目的であります。子供達にそのことを中心に教えることをして参りました。ところがトフラーはそれは今や音をたててくずれつつあると言っています。250年から近々40年位の間に又々大きな波に洗われているということを言っています。第一の波が農耕文明であり第二の波が産業社会であるとすれば、第三の波は情報化社会と言っています。コンピューターによって私達の生活はすっかり変わってきたと言われています。その第三の波こそが二十一世紀の世界を支配していく潮流になるだろうというのが彼の予言者的表現であります。しかし、これは私達の社会で現実化して参りました。その曲がり角にいるのがあなた方です。私は昭和20年に軍隊にいました。私のる飛行機には地図とコンパスと磁石とだけでした。飛行機を飛び立つと時間とコンパスとで飛行するだけでした。50年前はその位の航法で飛行機はとんでいた。その時片方では、アメリカが電波探知機でとんでいました。

皆さんは汽車というと新幹線を思うでしょう。でもそれは30年前、月の世界に達したのは1969年ですね。人類がはじめて月に降り立った1969年には今から22年前にはもう私達のコンピューターは月の世界にロケットを打出す程、精度の高いものになっていました。たった2、30年の間です。皆さんはその時生まれてなかったかもしれません、私なんかは、とっくに生まれていましたから、半分位は産業社会に生き、ほんのわずかひっかかりの所が情報化社会と言われる21世紀の中に突入しようとしている。そのはざまの中で大変大きな苦労をしなければならなくなつた。急激な社会変化こそが今私達にとって大事なことであり、急激な社会変化の曲がり角が現代といわれる時代であるのです。一年一年が激しく変わるのが現代という時代なのです。現代を象徴することが出来ればそれは転換期ということです。歴史の転換期です。

大きな価値や大きな問題が全部転換期にある中で若者はこの転換期をになって次の

時代を迎えるという大きな責任があります。私はとってもこれについていけないです。私は孫のテレビゲームについていけません。娘達のワープロにもなかなかついていけません。皆さん達はどうして曲がってくるかというと皆が一緒に新しい時代を予測しながら新しい時代の体制を考える。従ってそこに新しい価値観を見つけるということが必要です。これはあなた方に課されている一番大きなことです。

この転換期をとらえるためのいくつかの問題点ですか、岩波書店から「転換期に於ける人間」というシリーズが出ました。これは89年に出ました。11冊出ています。ところが今から3年前に出たのですが大変評判がよかったです。今度また、再版しまして91年の終わりから毎月1冊づつ出ています。ここでは、この転換の中で一体人間とはどう考えたらよいのか、文化とはどう考えたらよいのか。別冊で教育とはどう考えたらよいのか、という問題が出ています。

さて、この様な転換期を越えて、私たちの時代はどんな社会が出てくるだろうかという時に、一つは国際化社会というものです。国際化ということは15年前には皆が何のことだと言いました。「私は田舎だから外人さんなんか来たことないよ。そんなところで今更国際化等言ってもね。」と言われました。しかし国際化ということは日本という国は世界の中の一つの国だという、その位置を考えなければいけないよ。と言いました。そういう地球的な視野で物を考えることが国際化なんだよと言いました。今や、これは地球化と言われます。

もう一つは、この産業社会の中で成功した国々、これを私たちは先進工業国と名前をつけます。そして充分達していない国々が開発途上国といいます。産業社会の一番大きなメリットは効率化=豊かということです。皆が自動車をたくさん持てるよう、どこの家にもクーラーがつくように、どこも明るくするように、水洗便所を作るよう、その様な物質的な見方、効率化が産業社会の一つの目標でありました。その意味で、その目標を比較的点数よく取った国が先進工業国と言われる国々である。それに後れている国々が開発途上国と言われる国々であると考えられます。その中で先進工業国といわれる国々、それは西洋と日本等ですが、この国の社会で表れている一つの現象が高齢化社会なのです。まさに日本は他の先進工業国に比べれば多少後から高齢化が進んでいます。西欧諸国の65才以上の人口は16%位になりましたが、日本社会は

まだ12%位です。しかし日本も2020年頃には、日本人口の四分の一は65才以上の人達だろうと思います。65才以上の人達は働かないということを前提としますから、生産者人口と高齢者人口が逆転することになって社会が大きな混乱をおこすかもしれないと警告されています。新しい産業社会として安定している社会とはどんなものでしょうか。good-American-homeというのはご主人が働いていて奥さんが家にあって、きれいに着かざって時々ピアノのおけいこ等をして家に二、三人の家族がいて、ご主人が働いてきたお金でゆっくりした生活が出来るという家が産業社会の一つの目標がありました。これが私達の標準的な理想の家庭だと言われてきました。性別役割分担というのが農耕社会に於いては男も女も皆働いたのです。だから社会的には一緒でした。ところが産業社会になってから、性別役割分担が生まれて参りました。American-homeの様に家庭を守って子供を育てるという形に変わって参りました。それが今新しい社会において一方では働き手が足りないし、一方で知識を得た女性がそれを社会に還元してもらいたいし、色々なことがあって、性別役割分担「あなた作る人、わたし食べる人」というコマーシャルは女性に対して特別な問題があるよ、といって取り消される様に変わってきた理由は、実はそれだけが変わったんであってこの頃の強くなったのはくつ下と女だけだなんて言われる変化は実はもっと基本的なところでとらえられなければならない問題であったと思います。大きな流れが私達を変えつあるのだということを認識しておかなくてはならないのです。

そこで、農耕社会・産業社会、近未来の新しい社会の変化は間違いなくくるということはわかったけれども、その社会にどんな価値観を持ち、どんなことが自分達の大変な仕事であるかわからないところに我々の問題があるということを考えなければなりません。日本が世界で最も長寿国だという一昨年のおじいちゃんは「なごうやろ」75・86才、おばあちゃんが「はいはい」81・81才というのです。もっといろんな形で公害や何やで変わって来るだろうと思います。悪いことには、こういう風になってくると、私達女人も働く望みがない、子供達の苦労は見るに憚びない。子供達の生まれる率は1.53人、二人で2.15人位生んで下さらないと人口はどんどん減っていく。子供の数が減ると平均年齢はますます高くなっていく。年寄りの数がどんどん増えて若者の数もどんどん減ってくるということが今日本の大きな問題です。

1982年にウィーンで高齢者問題世界会議というのが行われました。それは特に先進工業国で高齢者の%が変わってくるという状態がどういう問題を起こしてくるかというと二つあります。

一つは高齢者自身の問題があります。高齢者の生涯学習の問題です。昨日兵庫県の知事さんから話がありました。アメリカで年寄りの生産性を高める運動が起こっている。日本でも年寄りがどんどん働く場所を作りたいがどう思うかということでした。元気印の年寄りをアクティブ・シニアといいます。エルダーホステルといって元気な年寄りが勉強しに来ています。75才を過ぎると終末の問題でありますからアクティブでなくなり、寝たきり老人になったり呆け老人になったりします。地域自体が住宅問題その他色々考えなければならない。

一つは高齢者を含む全体社会のあり方を考えなければなりません。このことについては三年程前にアメリカの学者とパネルディスカッションをしたことがあります。どういうことが高齢者のためにできているか。老人ホームはどれ位あるか障害者のため、どういう施設があるか等いろんな話をしました。その時は、養護学校が多くありますと言うとアメリカの人が「日本の厚生省はどれだけ老人ホームを作ったとか、どれだけ聾学校を作ったと言ってもどういうことだと思う?」といいます。

それは一つの社会の中で足が悪いから施設に収容します。お年寄りになって働けなくなったから養護老人ホームに入れてあげなさい。あなたは普通の学校に来たら邪魔だからもっと勉強しやすい様に聾啞学校を作ってあげましょうね。という風に、私達の社会からハンディキャップを持った人を皆出して、健康な人だけが残る。健康な人だけが残るというのは産業社会が持っている効率的に考えたらそれが最も効率がいい。

ナチスドイツが戦争国家といわれることに関してイギリスは福祉国家という言葉を作りました。その戦争国家という時にナチスドイツがやったことは何かといえばナチスドイツの最も精鋭だけを集めて、そのナチスドイツに不正義なもの、例えばユダヤ人等を撲滅してしまおうという運動を起こしました。それだけではなくてナチスドイツは障害をもっている人々は自分達の経済生活を脅かす食糧をたべて、しかも戦闘に参加することが出来ないのだからというので皆殺しにしようという運動を起こした。そのときペテルという小さな障害者の街の人は「この人達は私達と一緒に生きている

のです。私たちが二倍働きますから、この人達を生かして下さい。」と言って、その軍隊を追い返してペテルの街を守ったということです。一番効率を中心とする社会の考え方からいうならばその社会に直接効率の悪い人達をなくした方が効率のよい社会が出来るに決まっています。

日本はそうして、どんどんどんどん効率よくして世間に冠たる経済国家日本を作ったのです。しかしその結果、身体の不自由な人々は皆施設と称する姥捨て山においやられた。尼崎の例で、車椅子の少年が高等学校入学不許可になりました。その子は大変残念がって裁判をして今年、それは学校が間違ったという結果が出てきました。この子は関西学院にゆき、関西学院は車椅子で来る子のためのスロープもつけ教育棟にもエレベーターがつきました。日本はそういう点で三年はおくれていると言われました。地域の中で皆が一緒に生きるということ、地球の中で皆が生きるというようなことが、こういう新しい社会がくるということは間違いないことだと考えます。

今年の三月に岩波書店で「キリスト教を笑い」という本が宮谷東北大学法学部教授によって出されました。その中でこんな話があります。ある人が夢を見たのです。夢の中で死んでどっかへ行って目が覚めたのです。そして誰もいない所で白い着物を来た人が出て來たので「ここに何かありますか。」と聞いた。するとその人が「ありますよ。」といい「すみませんが水を少し下さい。」というとその人はすぐ水を持って來てくれた。のどの乾きがなおりお腹がすいたので「何か食べ物はありますでしょうか。」ときくとその人が「いいですよ。何がたべたいですか。」と聞いた。「こんなものが食べたい。」というと、すぐそれが出てきた。そのうちだんだんよい所に來たものだ、これは天国にきたのかもしれないと思い、今度はまた「フランス料理を食べたい。」と言うとフランス料理をもって來てくれた。今度はこんな物が着たいと言うと、またそれを持って來てくれた。そのうち余裕が出来て来「何か音楽をききたい。」とか「演劇を見たい。」とか言って毎日楽しんでいるとあきあきして來た。それでとうとう「何か仕事をさせて下さい。」と言ったのです。すると「それだけはさしてあげられないのです。」といった夢で死んだ人が何と言ったかというと「何か仕事することが出来ないのですか。」というと「ごちそうを食べてもいいですよ。昼寝してもいいですよ。音楽をきいてもいいですよ。演劇を見てもいいですよ。なんでも好き

なことをしてもいいけれど、ただ仕事だけはしないで下さい。仕事は困るんです。」と言われ、とうとうその人は腹立ちまぎれに「こんなおいしいもの食べ、こんないい着物きているのはあきあきした。」と言って「これなら地獄へ行った方がました」と言ったのです。するとその白い着物をきた人がびっくりして「あなたはここをどこだと思っているのですか。実はここが地獄なんです。」といったユーモアですね。私たちは一生懸命働いて豊かになりたいと思った。そして豊かになったけれど気がついたら大事なことが失われていた。これはおもしろい話しだなと思いました。

ヨーロッパで首脳者会議があった。その時は、ソビエトのブレジネフ書記長が皆に「ロシア人こそアダムとイブの子孫人であることを認める。」と言ったのです。するとヨーロッパの首脳者達は困ってしまうのです。いくら力の強いロシアからいわれたってそんなことはできないから西ドイツのシュミット首相が「あなたがたがアダムとイブの子孫であることは認めますよ。何といっても着るものもないのに自分は天国にいると思っているのですから。」とこう言ったというのです。今ソブエトは食べるものもない着るものもないという時代なのに、そういう錯覚があったという。そんなことが一杯かかれている本ですから面白いです。

ではその様な自分達が天国にいると思っていたソビエト、ロシアが昨年突然にくずれてしまいました。私達はソビエトは一番力の強い国であったと信じていました。ある意味に於いては、平和というのは、アメリカとソビエトが力の均衡を保って戦争がない状態を保つことが平和であるとすら思っていました。

平和論の大部分は核をどのように少しづつ減らしてくるかということで私達は平和の問題を考えてきました。ところがそういうものが89年のベルリンの壁がこわれ次から次へと大きな変化をしてきました。

では、どうしてあんなに大きく変わったかというあかしは世界中を偵察する衛星が飛ぶようになったからです。ソビエトが鉄のカーテンをひくといって、ソビエトの中だけをかこって新聞記者も入れないし、旅行も制限している中で、ソビエトは軍事力をどんどん強くして、どこよりも強国だと考えて参りましたが、宇宙の中を偵察衛星が飛ぶようになったときに気がついたことは、あれだけソビエトは民生を犠牲にして核爆弾だけを作つて実験をしていました。それを偵察衛星が全部うつだし、ソビエ

トは鉄のカーテンをひくことの無意味がわかつてきました。この時彼らは鉄のカーテンを自ら取り去らざるを得なくなつた。ペレストロイカとゴルバチョフ大統領から出るようになって情報化社会の中で一つの国が孤立して生きることが出来なくなってきたあかしであります。世界の秩序をこの情報化社会が変えてしまったということです。

さて、89年のベルリンの壁の崩壊から大きく変わってくる流れを私達がどのようにとらえたらよいか、どういう風に認識したらよいかというと、いくつかのパラダイムに認識の枠組みがあります。世界の認識の枠組みが変わったということです。それは一つは一番大きいスーパーパワーであるアメリカとソビエトの対立がなくなったことです。ソビエトロシアと称する大きな国が15の共和国に分解しただけではなくてふたをあけてみたら、正に食べるものもなく着るものもない。あるのは大きな核爆弾だけだということに気がついた時、ソビエトはどうしたらよいのだろうかということになってしまった。そういう超大国が消滅したということです。このため世界のバランスがすっかり崩れてしまったという認識をしなければなりません。

二つめの認識は、この事のために共産主義が資本主義かというイデオロギーの対立がなくなってしまったことです。中国でも、ソビエトでも市場経済を資本主義的な経済論理でやらなければならない。もう一つは主権国家といわれる国家も危なくなってきたことです。主権国家というのは、日本の国は日本の国、イギリスはイギリス、ドイツはドイツという風にそれは一つの権力があり、一つの領土があって、国民があるということです。今まで私達は世界の問題を考えるときに国際化（＝インターナショナル）という言葉を使いました。この主権国家というのが出来たのは、そんなに古いことではありません。日本では江戸時代には百いくつの殿様がいました。高松にも高知にも岡山にもいたる所にお城があり殿様がいました。皆大将がいて人民がいたのです。百いくつの国家が明治維新で大日本帝国という国が生まれたのです。ドイツも同じです。あちこちにお城があります。イタリーも同じこと、ベネチア・ローマ等に分かれていたのが一つになったのは日本より一年後れです。ところが今度は小さな種族が今改めて問われる時代になったのです。私達は主権国家という概念だけで世界を考えてきましたが、どこの種族がどんな文明を持っているかを考えなければならなくなりました。

一つの文明が崩れてきたことです。産業社会の中で生まれてきた文明は、西欧近代という文化を背景にしていた。日本は明治時代にヨーロッパ社会に追いつき追いこせといって西洋近代の持っている価値の体系一つの効率の社会を作っていくことに努力してきました。この文明が批判されると同時に多様化してきました。ケンドカルバーという人が「脱アメリカの時代」という原語は「East—Asia—Age」本を書いています。その中でこれからは、日本を中心とする東アジアの時代だというのです。しかし、その日本がどういう姿勢をとるかによって新しい時代がくるかこないか日本がイニシアティブを取らなければならないのです。18世紀・19世紀はヨーロッパの時代、20世紀はアメリカの時代、21世紀のアジアの時代といっているのです。要するに一つの文明というものがこういうふうにして多様化してくる時代です。その中に多くの民族性とか文化性を認めなければいけない。多様な異文化の中でお互いを理解することが必要だと考えます。これから変貌する社会では、世界認識の今までと違った方式を使わなくてはならなくなりました。皆さん若い人がこれからの世界を考える時に今までのかつてない価値を考えながら、そしてその中でどういう社会を作るのかを大事にしていくことが一つの問題です。

昨年の6月9日の新聞に、アメリカのCIAの委託した研究論文が発表されました。その中に、これから世界は日本を一番頼りにしなければならない国であり、経済的にも強いし、仲よくしていかなければならぬが、手ばなしで日本に手をさしのべていいのかという事をアメリカは非常に心配して、その結果、日本は世界的な責任感に欠け、経済的利益をひたすら追求する国であると分析した。ここで日本人の忍耐強さが強調され、技術の高さを称賛する一方、より多く経済力追求にだけ関心をうばわれ、世界の指導者としての責任感や、理念に欠けている。更にこの傾向は西欧諸国の価値観をしのぐようになり将来、決して世界の帝国とならないとなっている。これは大変なことです。これは一つの例にすぎません。しかし、大事なことは、私達が産業社会という利益を追求する効率を中心とする世界から、少しづつ世界が新しい価値観と新しい状況へと動いているのです。日本の国がいつまでも利益追求だけにとどまっていると世界の邪魔をすることになりかねませんということです。こうした中で次の問題をさぐってこなければなりません。

皆さんには子供の教育をどうしたらよいかという話をしました。今、私達の国は高等教育を受ける国になったといわれています。その意味では大変立派なことです。その教育を受けて何を目標としたかというと私達の世界が皆で豊かになるようにということでした。ところがこれはおかしいぞと考え出したのは60年代の安保闘争の時の学生紛争でした。ほんとうに皆が幸福になれるのだろうかと考えられてきました。今子供達の非行がふえています。子供達の非行は、戦後はひもじいから少し盗んで食べる－古典的非行でした。次に社会が少し落ち着いてきて豊かになると－遊び方の非行＝万引でした。殆どが初判の者です。その次に60年代になって深刻になってきました。これを自己破滅型非行といいます。シンナー遊び、暴走族などです。普通の学校について行けない子供がふえました。はじめは登校拒否児、中学校を卒業できない子がふえてきました。そして今では社会のために必要な小・中・高校の中で落ちこぼれがどんどん増えてきました。その数があまりに増えすぎて教育界では学校の再編成をしなければならないと言い出しました。生野学園の様な学校が作られてきました。落ちこぼれた子供のための学園教育百年の計をたてた教育システムがこれではだめなのだと子供達から告白されたのです。尼崎の学校の例や、登校拒否やシンナー遊びをする子供の問題が教育の世界で問われているのです。

同じことが家庭の中にもでてきました。先ほどのgood American-homeの夢もくずれてしまい女の人は皆働きに出るようになりました。家庭のあり方－大家族制から核家族そして共稼ぎの家族に移ってきますと、「家庭のない家族の時代」という本が一つのことを示しています。昨年、岩波から「変貌する家族」というシリーズが出ました。この中にはばらばらになっている家族をいろんな現象として書いています。たしか8巻です。家族のアイデンティティーということについて書かれています。単身赴任のお父さんが増えています。お父さんが電話で「次のウィークエンドは家へ帰るよ。」いうと、娘が電話口を押さえてお母さんに「お父さん帰って来るんだって。ディスニーランドへ行けなくなるね。」と言うのです。このコマーシャルは長くは続きませんでしたが、お父さんは遠くにいても家族は妻と娘だと思っています。ところがその娘にとっては、お母さんと妹とミケ猫といった具合に離れ離れになっているのです。共稼ぎ夫婦の中にも心理的離婚があります。

経済の問題に返ります。今まで経済の問題は資本と労働ということを中心としながら、生産ということを考えていくところに経済の論理がありました。私達は福祉の問題は計算に入れていませんでした。今高齢化社会になった時、社会福祉政策を日本の経済の中に一緒に抱き込まないと、日本の経済がなりたたなくなってきたときに、今までの資本主義の経済の論理ではわりきれないところの経済格差が入ってきた時代になったと言われています。これは国の中に生きるものがも一つの開発途上国の問題を一緒に入れなければならないという要因もあります。

岩波から「現代の経済」というシリーズができます。12巻で、まだ3巻しか出ていません。その一巻が「豊かな国・貧しい国」です。これは今まで経済の末端に入れなかつた開発途上国の状況を視野に認めなければ現代の経済は成り立たないということです。二巻目は「高齢化社会の社会経済学」です。三巻目はたしか「地球資源の問題と経済」です。そこでは何が問われているかと言うと経済学というものの中にこのような新しい状況を加えないと、ここだけの社会での状況では経済学が成り立たないということを証明しはじめているのです。もうすでにある種の学者はこういう問題を指摘しはじめているのです。それがどの様に堅ってくるかはすべて皆さんにかかっています。「豊かな国・貧しい国」の中でソビエトのことについて、ソビエトは12%を軍事費に使っていましたが日用品が不足していました。これからは世界市場と結びついて国内の再建する路をたどるだろうが、その事はとりもなおさずソ連経済が途上国化したことに他ならない。世界システムのきしみは国家の本邦回り（これもモンロー主義）と企業の相互依存のひずみが大きくなる。いわゆる他国籍企業というもののひずみが大きくなり、同じトヨタでも日本が日本のことだけ考えるとトヨタの経済はヨーロッパトヨタ・アメリカトヨタがどうなるかということになって日本の国の利益をトヨタの企業の利益のひずみがどんどん大きくなる。世界が新しい国際秩序を変革する努力をしないで、それぞれのえごで国際秩序の中の序列をあげることばかりしてては環境会議も悲観的にのびない。世界の環境を考えるためにスエーデンで開かれました。オゾン層に穴が開いて皮膚癌になる等という問題が表れて、そのため地球の環境を守ろうということがはじめて世界中の人人が言い出したのが72年でそれから20年後の今ブラジルで再び会議がもたれたわけですが悲観的なことしか考えられません。自動車を減らせといっ

たら、それだけ経済がおくれるから駄目だといい、開発途上国は日本やアメリカやヨーロッパに追いつくまでは、もっと努力しなければならないのですといいます。そんな所でだれがアマゾンのみどりを守ることが出来るかということになります。そういう国を離れて考えているのが実はロータリーであります。世界には100万のロータリアンがいまして（172ヶ国）、昨年は「私達の地球を守ろう」と呼び掛けました。「世界を理解し、世界の平和を築くことのためにロータリーは働く」と言いました。その前に日本から出た会長さん向笠氏は「人類は一つ、皆で一緒に世界を作ろうではないか」と呼び掛けました。ロ

ータリーという団体は世界がどうなるんだろうかという事を一生懸命考えるのがロータリーの大きな仕事になってきたのです。世界環境会議はおそらく失敗に終わるかもしれない。私達はポリオプラスという募金をしいてます。世界の子供達から小児麻痺をなくそうという運動です。この運動のために、昔種痘が人類からなくなったと同じ様にこの運動のために日本の国で40億円のお金を集めました。世界中で集め国連のWHOと協力してポリオをなくす運動をしたのはロータリーです。

なぜ若い人達にこの様に来てもらうかというと、私達は新しい世界に向かって次の時代をみながらそういう世界を人間として作っていくことに協力してもらおうと思うからです。大人だけでは出来ないです。若い人達と一緒にあって新しい価値観と秩序を作っていくために努力するのがロータリーですから、皆さんがたにこれから苦労していただきたいのです。あなた自身をこえた目を持って世界のことを考えて、家族も巻き込んで地域社会も巻き込んで新しい世界を築くことに努力しなやーという私達の夢をこのライラーで伝えたいのです。地球社会の人達みんなが幸福に生きるために。ライラーに来た意味は、そういう時代を託されているということです。

参加者感想文



A グループ



下 地 清 史

何とはなしに思った事3つ

1. キャビンタイムで「素っ気ない関東の人間」という話題が出た時、「関東人」に対し批判的な意見ばかりであった。

7割神奈川3割高知と思っている私は「そうだな」と思う反面、「そこまで言わなくて」と思い、少々悲しかった。

2. オリエンテーションで説明があった通りに、食事に関して不自由しなかった。しかし、この裏には不条理と思えることが1つありました。

初日のパーティーでのことです。ほとんどの食べ物が平らげられていた中で、誰からも無視されたものがありました。それは刺身のつま・大根の千切りである。

大根を育てるのだって数ヶ月もかかるのだ。大根を育てた人や大地の恵みを無視して、はたして何ができるのだろうか。

3. 此 君 紛 翻

道 不 紛 手

今 見 輕 作

人 管 薄 雲

棄 鮑 何 覆

杜 如 貧 須 手

甫 土 時 數 雨

交



管 睦 人

この度は、ライラセミナーに参加させていただいた事を皆様に心から感謝しております。なぜなら新しい出逢いがたくさんありました。私は勤めているのであまり大学生の皆様と接する機会がなく、年齢が少し離れているので仲良く出来るかと心配しておりましたが、たくさんの友達が出来、やっぱり自分の方から進んで行かないとだめ

だということを(新しい出逢いがない)事を教えていただきました。

それと黒木先生の「日本人とは」という講義より、自分のためだけに生きるのではなく、人間らしさをふまえた上で、社会的にもがんばり、自然との共存を認識しなければならないことと、大和魂を見つめなおすということを教えていただき、奈良先生には「今を生きる」ということで自分自身の真理を持った上でまわりへ目をむける、つまり自分の幸福を祈りながら他人の幸福も考え、天地自然の恩恵を素直に感謝し、報いを求めずして暮すということをおそわりました。

それに思索の時間も初めはどうかと思いましたが、自分一人で色々と見つめなおすのにはいい時間でした。それに「青少年指導者のるべき姿」でのバズセッションでは、色々の討論が出来たのが有意義でした。

最後に、初めは三泊四日で何をするのかわからないし、長いなあと思っておりましたが今では、あっという間に過ぎ去ったという感じです。

今は自分さえよければいいという考え方を思った人が多いような感じですが、自分の事だけを考えるのではなく、まわり「他人」への思いやる心それと相手を愛して報いを求めるという心が必要だということがわかり、大変素晴らしい心の勉強が出来たことを先生はじめ皆様に感謝しております。

また皆様にお逢い出来る日を夢みて!!

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

黒田みゆき

最初“RYLAセミナー”と聞いても何をするのか全然分らず、半信半疑でとり合えず参加してみようかナという気持ちだった。ロータリークラブと言えば、お金持ちの人が集まって食事をしたり、仕事の情報交換をするぐらいにしか知らなかつたので、なぜ青少年指導者育成のセミナーなんか主催するのか分らなかつたが、行って話を聞いているうちに、様々な奉仕活動や、青少年の育成に力を入れていることが分かった。セミナーでは三つの講義を聞いたが、どれも分かりやすく興味深いものばかりだった。一つめは『大和だましい』すなわちあらゆる物事や景色に素直に感動することの大切

さを学び、個々の人間の存在の尊さを考えた。二つめの講義は「真理」という言葉の意味について考えた。物事は常に多面性を持っており、人々はその一部分に触れて、それがすべてだと思いこむために議論がおこるが、本当の真理というものは、いろんな多面性を全て含んだ全体像だということを学んだ。私は気が強くて、自分と違う意見の人と対立することが多いので、反省すべき点がたくさんあった。最後の講義は今井先生の話で、とても興味を持っていたが、前日のてつ夜のせいで話の途中に居眠りをしてしまい、先生に申し訳なかった。けれど「本当に社会や環境をかえていこうと思えば、役に立たないもの、非効率なものを社会の外に押しやるのではなく、それらを含む全体社会の在り方を考え、自分自身がまず変わらるよう努力しなければならない」という先生の考え方へ、感銘を受けた。また、キャビンでは班の人達と「ボランティアの難しさ」について話した。ボランティアや奉仕活動に参加することに、多少の照れもあり、本当に素直な気持ちで参加しているのかという疑問が私の中にあったが、誰しもその気持ちを持っており、それが出発点だと聞いて安心した。三泊四日の短い間だったが、いろいろな面で学ぶことがたくさんあった。企画して下さったロータリーのみなさんに感謝したい。



佐 伯 直 美

今、私は、大変充実感でいっぱいです。この3泊4日は私にとって自己を見つめ直し、いろいろな立場の人と接し、自分を磨くとてもよい機会でした。

普段知り合えない人たちとたくさん友達になり、様々な考え方、意見を聞き、大変勉強になりました。私自身が学生であるので、学生以外の人とは話す機会もあまりないので、社会人の人の考え方へは、新鮮なものであり、さすがだなあと思いました。また違った地域の人が集まっていたので、知らない土地の名所や方言などを知ることができ、楽しかったです。

私は今まで自分の所属しているJAC以外の行事にあまり参加したことがありませんでした。そういう機会がなかったのもありますが、自分のやっていることが他の人

にうまく伝えられるかどうか不安だったからです。

しかし、この4月から3回生になり、中心にやっていかなくなるので、一度外から自分の団体を見つめ直し、自分の意見が、どれだけ他の人に説明できるかためしてみようと思ったのです。この意味で、ライラは、私に勇気と自信を与えてくれました。ライラで出会った友達は、JACを理解してくれ、他の世界も見せてくれました。また講師の方々の内面、精神面での講義をきき、いろいろ考えさせられたりしました。そして思索の時間でその講義もふまえて、自己を見つめ直すことができ、大変いい経験となりました。とかく流されがちな生活を送る中で、自然に囲まれて自己を見つめ直すのは、非常に大切なことだと実感しました。

最後になりましたが、このような機会を与えて下さったロータリーの方々、また余島でお世話して下さった皆様に感謝すると共に、これからもライラが続くことを願います。

ありがとうございました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

深井有子

RYLAセミナーの4日間、とても有意義に過ごすことができました。とてもうれしく思います。

ロータリーということもよく理解していましたが、RYLAセミナーの「プログラムのねらい」に心ひかれるものを感じ参加させていただきました。

講演テーマ「歴史を読む」、「現代を生きる」、「未来を見る」を聴講し、ただ時間に流されている日々の自分自身を見直すことができました。また、バズセッションの「青少年指導者にあるべき姿」のテーマでフォーラムしたことも含め、国際化社会の進む近くは21世紀をめざして、必要とする指導者とは反比例している今の青年に必要なこと、自分も含めとても難しいことですが、平和を志向できる心のゆとりをもちたいと思います。今、私が大切にしていることは、ともすると自分を見失いそうになってしまったときに自分自身を位置づけていく座標軸ともいうべきものがあることです。

セミナーに参加させていただき得たものの一番大切なものはやはり出会いでした。すばらしい講師や良き先輩のカウンセラーとの出会いをはじめ、心を開いて話せた良き友との出会いでした。この友情の輪をいつまでも続けていけるよう、そしてセミナーで学んだことをプラスにしていけるように努力していきたいと思います。

全体をみて、キャンプファイヤーでは、もっと多くの人と語り合いたかったです。本当に十分に自由時間があり、キャビンタイムが朝までというのもおもしろい？思考だと思います。

これからも、もっと多くの青年にこのRYLAセミナーにふれてほしいと思います。

4日間、お世話になり、大変ありがとうございました。



高宮千津子

このセミナーは、私にとって、一生心に残る行事だったと思います。

私が得たもの、勉強させてもった事、本当にたくさんあります。

まず、一番得たものは、1つの事をみんなで考える上で、年上の人とも、対等に話ができる、一番年下の私の意見でも、意見として認めてもらい、取り入れてもらった事です。それをしてもらった事で、私の中で、もっと勉強しないといけないと思い直した事や、少し自分に自信がもてた事があります。

講義も少し寝てしまったけど、聞いている時は、すごく興味深かったので、寝てしまったのが残念でした。

あと、得たものですごく大きいのは“友達”です。私はA班でした。私は、セミナーの中でA班が一番良かったと思います。正直言って1日目のキャビンタイムは、10:30で終わってしまったし、自分が言いたかった事もうまく言えずにいたのですごく残念で、いやだなあと思っていました。でも、2日目からは、すごくいい話し合いができる、自分の言いたかった事も言えたし、皆、真剣に聞いてくれたので良かったです。3日目のバズセッションでは、すごく班の中で討論がありました。私も意見をいっぱい言いました。でも、こんな風に意見を言い合えて、納得のいかないことは何時間でも話

し合える事はすごく大切な事だと実感しました。フォーラムでも私達の班は割と、質問や意見を出した方だと思います。でも、その時私は、この人達と同じ班で、すごく良かったと思いました。

3泊4日、すごく短かった様に思えます。もっともっと話し合いたい事や、教えてほしい事がありました。でも、また会う事を約束したので、その時まで我慢する事にしました。

セミナーに参加してこれから今まで以上にがんばろうと思います。

セミナーを開いて下さった方々、本当にありがとうございました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

東 渕 敦

今回のセミナーで、私は自分のこれまでの生き方がいかに消極的なものであったかということがよく理解できた。しかし、それはきっと私だけではなかっただろうと思う。現代人は社会という1つの大きなモノの中にのみ常識を見い出そうとしている。つまり、社会に合わせることにより、その力の中に保護されることを望み、本当の意味で、自分の力で生きていこうとしていない。このことが分かったのはセミナーの講義のおかげだが、それまでは私自身、そうすることがあたりまえのように考えていた。子供の頃は「なぜ?」「どうして?」という疑問をなにかにつけて持っていたはずなのに、いつの間にかある物すべてをそのままうけ入れることしか出来ない機械のような人間になっていた。考えることができないから、積極的な生き方も出来ない。全て受身でおわってしまう。このことをとても痛感させられた。だからといって、いきなり生き方を変えることはできない。やはり私は社会の一員であることにかわりはないのだから。今自分に出来ることは、少しずつ、生き方を変えること。心のままに生きることができるよう努力することだろう。そして、かつて私がそうであったように、これから育つ子供たちもきっと自分を表現することができなくなるだろうと思う。せめて、私が接することのできる子供たちにはそんなことがないよう指導できるようになりたい。しかし、今は自分のことで手一杯だ。

細木弓子

私はこのようなセミナーに参加したのは初めてで、このライラがとてもいいということは以前から聞いていました。私にとってこのライラの目的を青少年指導者として感じるより、人々が各自の自己研鑽しようとしている場をもうける事と感じました。そんな皆の姿の中から今の自分がいかに未熟であったか、それをひしひしと感じました。

キャビンタイムの時、障害者の人達の話になった時「どこかでそういう人を軽べつして見ていると思う。」という人に対して、ある女の子が「私は自分で軽べつしたらいかん、軽べつすることはいかん事やって分かってるけど、そう思ってしまうんや。そんな自分が、はがゆくて仕方ないわ。」というのを聞いて私は素直に彼女をすごいと思いました。いけない事と分かっていてもどうしてもそうしてしまうという言わば自分に打ち勝てない恥ずかしい自分なのに、それを思いきって皆に言えてしまうということがとても素晴らしい事と思ったのです。人はどうしても自分をかっこよく、飾って他人に見せがちです。でも本当に素直になるということは思っていても難しいものだと思います。一步でもありのままの自然の自分に近づいている彼女が私はとてもうらやましく思い、尊敬できる人であると思いました。また、このセミナーを通じて全く新しい人々と接し、一つの事に向けて協力するという仲間意識を痛感させられました。私はこのセミナーを自分を見つめ直して、新しい自分を育てていくことであると思っています。自分をもっと向上させたいという人に最高のセミナーと感じました。3泊4日という本当に短い期間でしたが、普段では感じられない程、中身の濃い、充実した毎日で、ずっと昔から友達であったような雰囲気で感動しました。この新しい友達をこれからも大切にしていこうと思います。



片山秀昭

余島での三泊四日の生活は驚きと感動、喜びと発見、夢と現実の毎日。

日々の行動をふり返える間もなく新たな感動が重なって行く。キャビンタイムのひ

ととき、静けさの中、笑いと語らいの大きな輪はとどまる所を知らない。きのう出会ったはずなのに心許しあい夜明けまで語り明かしたあの日、大きな流れの中、時は過ぎて行く。ゆったりとしたスケジュール、参加者自らが選択出来るプログラム、過去、未来の人としての生き方、余裕とやすらぎ、心に残る講演……。ただ一人島内の森を歩き、雲の流れを見、潮騒に耳をかたむける時、何もない、充実を感じる。砂浜での語らいの中、新鮮な出会いがある。アーチェリーにチャレンジ、的を射る、耳につたわるここちよい響き。すぎゆく時はもどらない。別れの朝、時はすぎて行く。カリンの木に思いをつたえ、友との再会を約束し、島をあとにする。振り返って見る。島が遠くなつて行く、我にかかる時、余島での四日間が走馬燈のようにすぎて行く。

ロータリアンやロータリアン夫人の皆様の気くばり、カウンセラーの方々の心くばりにあまえて充実した日々をすごすことが出来ました。感謝の心を生活の中に生かし、青少年指導に生かしていきたいと考えています。お世話になった皆様、本当にありがとうございました。



山 田 弘 乗

私は、今年1月ほどの間に2つのライラセミナーに参加させていただいた。1つはRI2640地区であり、1つは今回の2670地区のライラである。前者はローター・アクト・クラブの一員として、後者の今回は一受講者としてであった。二回受講するとどうしても比較してしまう、その点お許し願いたい。

私の感じではどちらのライラも、それぞれともに有意義であった。が、得るものにはまったく違っていた。2640地区の方は、講師による講義を中心とし、上からのいわばおしつけるといった方法で、指導者としての技術面を中心に青少年教育が重要視された。それに対し、今回は受講者間の討論を中心としていわば下から青少年指導者としての自覚と心構えなど自ら体得させる方法で、精神的な面が強調されていた。どちらが優位かに立っているということは問題でなかろう。なぜなら、青少年教育には、技術面も精神面も欠かすことのできないからである。

両者とも言えることはライラ研修の内容をもっと分かりやすく事前にPRするべきではなかろうか。受講生達にとっても事前にどういう内容で行われるのかをもっと早く知っておくべきであろう。なぜなら、受講生達ももっと真剣に受講するためには前もって予備知識、事前準備を必要とするのではなかろうか。このことは、特に2640のライラで、痛感させられた。ライラの主旨をはっきりと打ち出されず、講義の内容より講義の量ばかりに目がいき、受講生は受けた内容が消化されないでいたと思う。しかし、この度のライラは講義のあと充分に自分の考えを他人のものと照らし合わせることで受講者が自覚するという点にたいへん感激した。

ロータリアンのライラに対する考え方の違いにも多少の違いが感じられた。というのは、2640地区についてだが、ロータリアンが、全員がとても熱心に取り組んでいたのがとても印象に残った。しかし、この度のライラは、いま一つ協力的でなかった人もいたようである（これは私の父を含めてではあるが）。

こまかい点ではキャンプファイヤーに、儀式的なものを求めるならば、日程を組み直した方が良いのではないかと思う。できれば初日に持ってきた方がより特別なセミナーだと印象づけることができるからである。そして、初日のキャビンタイムへと引きつがれてお互いの理解を深められ、友情を暖められると思われる。

2640のロータークトの一員として、他地区のことなので恐縮なのだが、2670地区ロータークトはアジア第一第三ゾーン研修会をふくめて、ロータークトの参加率が少し悪いのは残念な気がした。世界大会クラスの行事をする地区なのにいま一つ積極さがたりないのではないか。また、せっかくのライラという自己研鑽の場にもロータークトが少ししか参加せずムダに過ごしているのではあるまいか、少々もの寂しさが否めなかった。ロータークトの立場が、すこし過保護視されている傾向があるように見える。といっても、2640地区のロータークトは、ほったらかしなではなく自主性を伸ばさせるような環境をつくってもらい同じ目の高さで指導してもらっている。以上が、あくまで個人的な率直な意見である。



野 口 真 里

私は、香川大学ローターアクトクラブに所属しており、スポンサーのロータリークラブより推薦されて、このRYLAセミナーに参加しました。

4月3・4・5日の午前中に行われた講演では、先生方のお話は考えさせられるものがあり、夜のキャビンタイムでは、それらについて討論されたりしました。1つ要望をいえば、国際的な活躍をしているロータリーですが、国際的に関する講演がないのは残念でした。

4月3日の思索、レクリエーションの時間は、静かなる時間の後でのアクティブな時間。私は、初めてボートこぎに挑戦しました。キャンプファイヤーは火が燃えなかつたのは残念でしたが、このセミナーの参加者全員が1つになって、ゲームをし、歌を歌いました。

4月4日にはバズセッションの後でフォーラムがありました。まず4人グループでの話し合い。そしてA班での話し合い。約20人、それぞれに意見があり、1つの議題においても、それぞれに視点が異なります。本気で考え、議論をしました。その後のフォーラムでも、トップバッターであったにもかかわらず、我がA班の代表は、立派に発表してくれました。

このセミナーで毎夜行われたキャビンタイム。初日は、お互い初対面でよそよそしかったけれども、2日、3日とたつうちに、面白目な話題から、お国自慢、恋の思い出まで、多くのことを話し合いました。また、何年後かに、このA班のメンバーたちと新しい恋の思い出など話せたらと思います。

最後に、このセミナーにおいてお世話して下さった方々、特にカウンセラーの方にお礼を申し上げたいと思います。私もこの経験をこれから学生生活において大いに生かしてゆきたいと思います。

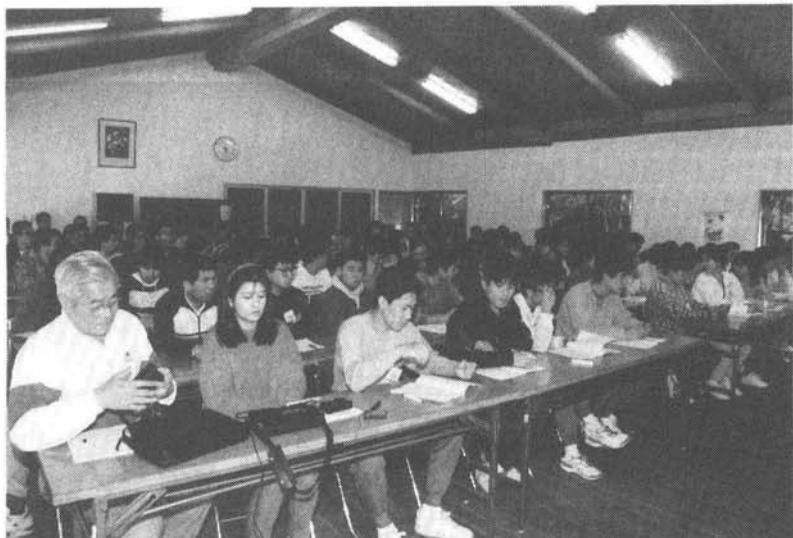


水 谷 淑 子

ほころびかけた桜の下から、笑顔で集まりました。迎える私が一番緊張していたの

です。しかし、すぐに愛称で呼び合う若い人の柔軟さに驚き、心が解放されていくのを感じました。その後の充実したスケジュール、夜のキャビンタイムでの、キラキラした感性のぶつかり合い、バズセッション、フォーラムとグループの気持ちが、一つになっていくのに感動し、A班の一人一人に心から拍手を送りました。実り多い四日間は、アッという間。

満開の花の下を、幸せな気分で一緒に歩き素敵なお会いをくださった皆様に感謝しつつ、余島を後にしました。本当にありがとうございました。



B グループ



杉山博幸

このセミナーに行って最初思ったことは、全然知らない人ばかりでどうなるのかと思いました。

初日は、開校式とオリエンテーションが行われ、そして、期待していた夕食になりました。だいたい予想していたくらいの味でした。その後、キャビンタイムでした。最初キャビンタイムとは何かなと思いました。それは、各班に分かれて班のみんなでいろいろな事を話す時間でした。初めはみんな知らない者ばかりでなかなか話が進まないで静かでした。そうしている間にだんだん話が続くようになりました。

2日目は、午前中、講義でした。「日本人とは」という題名で黒木先生の話を聞きました。この講義で一番心に残っていることは、何かをする（がんばる）ことによって、よい結果が生まれる。また体験することにより、感動及び知恵が得られる。これが一番心に残りました。そして昼からレクリエーションで船に乘ったり、テニス、ソフトボールなどをしました。ソフトボールをしたのがとても楽しかった。その後キャンプファイヤーがありました。手遊びとか歌を歌ったりして楽しかった。

3日目も午前中講義でした。「今を生きる」という題名で奈良先生の話を聞きました。そして昼からバズセッションということで、青少年指導者のあるべき姿という議題で班のみんなでそれについて話し合いました。その後、フォーラムでその話し合いまとめた事を各班順番で発表しました。どの班もいい事を発表していました。

4日目の午前中、「21世紀を担うものとして」という題名で今井先生の話を聞きました。そして閉校式になりました。

4日間で一番よかったことはいろいろな人と知り合えたことです。またセミナーで学んだことを生かせたらいいと思っています。



鈴木三恵

RYLAセミナーを開催して下さった、運営委員会の先生方には、大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。朝はウグイスの鳴き声で目覚め3泊4日のセミナー

は感動のしっぱなしでした。まず若い方達との出会い、開校式、パーティーでの御馳走、3人の先生の講義、キャビンタイムでの語り合い、キャンプファイヤー、バズセッション、フォーラムなどです。キャビンタイムでは、カウンセラーの先生をまじえ時間の立つのを忘れ、語り合い楽しい3日間でした。講義は少しむつかしい所もありましたがなんとはなしに高度な知識をえたようです。人間は一人では生きていけない。人間は感謝を忘れてはならない。物事の真実をとらえ、それをどういうふうにとらえるのか因果律、原因と結果、天地自然は自分の力を出しきって相手を愛してむくいをもとめない、不平不満は嫉妬心から生まれる。他人と比較するから出てくる。毎日が楽しいのが一番です。このようなすばらしい講義を受けほんとうに良い勉強になりました。良い友達と出会ったこと、お互いに心を磨き合い、笑顔を忘れないで、このRYLAセミナーで得た知識をいかして地域のためまた職場でリーダーとしての役割をはたしていきたいと思います。ありがとうございました。

私はホームヘルパーをしております。RYLAの中では最高の年齢ではなかったかと思います。最初はどうしようかと思いましたが若い方とお友達になれたことうれしく思いました。

字はへただし、文はまとまりのない文ですが良きように編集して下さい。

いろんな事に感動して特にキャンプファイヤーでは、涙が出て来てとまりませんでした。キャンプファイヤーの火がもう少し長くもえていてくれたら、もっとすばらしかったのにと思いました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

中 澤 宏

不安でおしつぶされそうな出発前の自分が、感動に酔いした終わりの自分の姿をどう想像したであろう。

過去・現在・未来の講義で気付かなかった過程を教えられ、グループ活動で仲間の必要性を教えられ、キャビンタイムで語り合う楽しさを教えられ……。そして、終わりが近づくにつれ、数年前の自分に戻りつつあることをしっかりと悟っていた。

「これからの青少年指導者に大切なこと」！

講義を通じて、多くの知識を養い意義ある研修ではあったが、ほとんどの参加者は、寝食を共にした仲間との語らいを通じての感動が一番の収穫だったよう感じた。私にとっても、忘れていた本気でぶつかる大切さ、楽しさを思いだしたように思う。これも、良き仲間に出会えたからであろう。

- ・夏の再会を実現させた木登り名人福井君。
- ・徹夜を苦にしない元氣者杉山君。
- ・小豆島を都会と感動していた合田君。
- ・恋愛論に多いに話題を振りまいた大河君。
- ・すべての行動に笑いを生み出す名人沖中君。
- ・黙っていても何かをしてくれそうな川西君。
- ・四日間の苦労（我慢）が最高だった高橋君。
- ・我B班発表者。おしおこと芳本君。
- ・花束を楽しみにしていた橋爪君。
- ・自分の考えをしっかり持った森さん。
- ・夏の再会を一番楽しみにしていた秋山さん。
- ・一見無口。おしゃべり娘、建沼さん。
- ・話題提供者、しっかりものの柳村さん。
- ・B班の最年少者、かわいい（？）鈴木さん。
- ・なんとも言えない最高の笑顔、杉本さん。
- ・最後までもの静かなお嬢様（？）中尾さん。
- ・飲んだら最高！カウンセラー安藝さん。
- ・フォローが抜群！カウンセラー澤田さん。

そして、共に学んだ参加者、世話をかけた指導者の皆さんに幸多かれと！



福 井 豊

小豆島・余島とてもあたたかいなあ～。

RYLAセミナー初めての参加。ぼくは青年団の先輩に言われて来ました。他にも学生・教師・社会人がおり、いろいろな人に言われて来た人もいたようだ。1日目のキャビンタイム班(数人)にわかつての晩みんな何を話していいのか、そのうち酒がはいると静かなふんいきから、いってんして変わり酒がはいるところもちがうのか。2・3日になるとみんな友情の輪ができたみたいだ。午前中は講演を聞き、みんな最後の日はとてもねむたそうだった。レクレーションがあり、とてもいい汗をかけたようだ。キャンプファイヤー、火がきえるのが早くてとても残念だった。ゲームあり歌あり、あ～あんなゲームもあるのかなあと、とても参考になりました。バズセッションのテーマ、はじめむつかしいかなと思ったけれど、こまかくわけて話しているうちいろいろ考え方でもあったようだった。最後に班(17人)酒をのみながら夜おそくまでいろいろな話ができ、いろんなことがありみんなの輪ができたような気がする。この出会いを大切にこれから何年も、きれることなくしていけばいいなあと思った。

3人の講演ねむいなかいろいろな話がきけ、これから何かやくにたてれば、自分なりにいい話が聞けたなあ～と思った。



杉 本 玉 美

RYLAセミナーに参加して、まず一言“よかった”。

でも、セミナーに誘われた時はどうしようと迷ったが、こんなチャンスは今だけかも知れないし、来年は誘ってもらえないかもと思ったから参加することに決めました。がやはり当日になると不安がいっぱいのまま出発した。余島についた時、何もないのにびっくりしたが自然がいっぱいで気持ちよく、空気もきれいで、のびのびできて…。だけど四日間居ることができず非常に残念でした。二日間しか学べなかったが、キャビンタイムでは沢山の人と話合いができ、またある人が「リーダーは、その人の立場になって考えてやる事だよ。」って言ってたのをよく覚えている。そして皆の色々な

考え方や意見が聞け、私のこれからにプラスになるだろう。

また、講演の方は黒木先生の「日本人とは」しか聞けなかつたが、先生がおっしゃつてた様に今は一回しかないから後悔したくないし、人生のチャンスを大切にしたい。そして、やまとだましいを忘れてたくないと思った。

それと、私が一番楽しかったのはレクリエーションの時間でソフトボールができたことです。男の子達が少人数でされて仲間に入れてもらったのですが、普段だったらソフトボールなんて、って思っていないけれど、ここでは気が大きくなり色々な事にチャレンジできた自分が不思議だ。みんなといい汗をかき、ふれ合う場がもて、この夜のキャビンタイムは前日より話に花がさきよかったです。一日ずつ皆と仲良くなれて楽しかったです。四日間居るともっと仲良くなれただろうと思った。本当にすばらしい二日間どうもありがとう。また、皆にセミナーの事いっぱい話をあげる…。



川 西 正 浩

私は神戸YMCAで小学1年生を対象とした野外活動のリーダーをしています。キャンプ場の見学と何か得るものがあるだろうと思い参加しました。参加してみないとよいこともわからない。自分の目で見、耳で聞き、体で感じることが大切なでしょう。自分なりに感じたこと、参加してよかったですと思うことは、なんらかのかたちで自分の成長にもつながる。いろいろな考え方、やり方を知り、決してマイナスにはならない、年齢、職業、目的もさまざまな人たちと講演を聞き、討議し会話することは、リーダーとしてだけでなく、人としていろいろ勉強といいますかいい体験をさせて頂いたと思います。人それぞれ違うでしょうが、多くのことを得て帰った人、何も得ず帰った人はいないでしょう。どんな小さいことでもいいと思います。得て帰るというか、何か感じて帰ったことでもしょう。では、自分はこのセミナーに参加して何を得、感じて帰ってきたかを考えてみると、余島キャンプ場がどのようなところかみれたこと、多くの人と知り合えたこと、現在のリーダーとして自分を見つめ直す機会がもてたこ

とです。これらを今後に生かしていきたいです。今の活動をしていることで、このようなセミナーにも参加させてもらえたし、こどもたち、一緒に活動をしている仲間、それを取り巻く人たちの中で自分も成長し、させてもらっています。どんどんこのような機会があれば参加させて頂きたいと思います。ありがとうございました。



合 田 秀 人

まず最初に、このRYLAセミナー受講にあたり、ガバナーを中心とするロータリアンまたカウンセラーの皆様に多大なご指導を賜り厚くお礼申し上げます。

このセミナーの体験は、私にとって大きな宝物となりました。職業も年齢も違う人々が集まり、一つのテーマで話し合う。また寝食を共にし、夜には少々の酒をのむ。まったく初対面の人達と一人一人が自分の殻をやぶりすべてをさらけ出す。そして吸収できることはすべて吸収しようとする貪欲な姿勢。いろんな事を聞き、いろんな事を話す。自分自身本当に貴重な体験となりました。

この様な体験を自分の後輩達には一人でも多くさせてやりたいと言う気持ちでいっぱいです。また、この様なセミナーを自分たちの手で、作りあげたいと言う気持ちも出てきました。

最後になりましたが、これから自分のこと言うことで一言でも他人の意見を多く聞き、一步でも前に進む。自分たちが、からの若い世代はもとより、すべての世代をリードしていかなくてはいけないと思う。またリードしていきたい。



秋 山 恵里子

私の父はロータリアンで、父の推薦者が娘の私でした。父が「このセミナーはたいへんいいから行ってみたら」と言うので私は参加する事にしたのですが、いったい何がどういいのかしら、と思って父に聞いても「行ったらわかるよ」なんて言うので

“まあ新しい友達も出来るし、何事も経験”と思い参加しました。

班でもほとんどの人が「このセミナーはいい」と先輩や知人に勧められて来たと言う事で、いったい何がいいのだろう?と初日からキャビンタイムで議論が始まったのです。そして、仲間ができる事、年齢の違う人と話しあえる事など、一応あたりまえの結果は出たのですが、結局正直なところ「ステキな出会いがあるかも」というのが本当の結論ではと意見がまとまったのです。最終的に、私には全くそんな出会いはなかったのですが…。

でも、私は今まで人と議論をして、自分の考えを述べた事がなかったし、いろんな事を話し合い、意見を口に出て言えた事でとてもステキな時間を持つ事が出来ました。また、主張する事の難しさも考えさせられました。

私は、青少年指導に直接係わる事はありませんがこのセミナーに参加して、精神的に成長できた様な気がします。

今回限りでなく、班の人達とは、これからも続けてゆきたいと思っています。



柳 村 希代子

すごく実のある4日間だったと思います。日頃は何かと時間に追われ、ゆっくりと自分をふり返ってみたり、考える時間がもてないまま毎日が過ぎていく中、余島では、すごく自分の時間というものがもてたように思います。ちょっぴり自分自身をみつめてみたかった時機にこのセミナーだったので、なおの事だったのだと思います。

特に講演を聞いて、私なりに納得した後での思索の時間が本当に良かった。青空の下大きな海を目の前にして、岩場でゆっくりと時をすごせるなんて、最高でした。できれば3日目もほしかったな…と思うくらいです。講演も、今の私には本当に心にしみるような物ばかりで、すごく為になりました。

ただキャビンタイムは、なかなか話が盛り上がるまでに時間がかかり少し苦しかったかな? 1グループの人数はもう少し少ない方がいいと思います。

しかしこの4日間、私には貴重な時間を過ごさせてもらい、おおげさかもしれま

せんが命の洗たくができました。

ぜひぜひ、これからもこのようなセミナーを続けていただき、私のような思いをたくさんの人々に味わってもらいたいと思います。ありがとうございました。



建沼友子

青少年の指導に当たっている人達のためのセミナーと聞いて、多くの期待と少しの不安を抱いて参加させて頂くことにした。

多くの期待とは（青少年の指導という程大げさのものではなく、子供たちのリーダーをして自分もいっしょに楽しんでいるのだが）プログラムのねらいと内容の中の第2として青少年を指導する具体的プログラムの新しい考え方、方法、技術を習得します、である。

他の人達の例えはキャンプのプログラムや子供たちといっしょに行うゲームなどを教えてもらえるのだと思って期待していた。自分にあまり専門的な知識もないまま、行けばなんとかなると思って昨年の夏、大きなプログラムのキャンプファイヤーを担当した。状況的要因もあったが、やはり自分たちの技術のなさでちょっと失敗に終わってしまった。そんなこともあって、ぜひ今年のためにと思っていたが、そういう時間は特になく、キャビンタイムや友達との会話から得なければならなかった。

少しの不安とは、青少年の指導に当たっている人というくらいだからみんな本格的ですごい人ばかりなんだろうなと思い、自分の経験ではみんなの話についていけないのではないだろうかということだった。

しかし、そんな心配もまったくいらず、少し難しい3日間の講演、もう少しテーマの幅を限定するか、違ったテーマなら話しやすかったなと思ったバズセッション、毎回おいしくて、楽しみだった食事など、すばらしい大自然の中での3泊4日だった。



中 尾 陽 子

カウンセラーの沢田郁先生と出会えたこと。これは私にとって最大のものとなりました。大学をやめようかと悩んでいる私に、先生は次のようにアドバイスしてくれました。

「大学を卒業することはこの世の中で生きていくための手段なのよ」と。

この一言で私の「大学を卒業しなければいけない」という義務感がなくなり、目の前が開けていろんなものが見えてきました。そして「もっとリラックスして、何でもいいから思いついたものをやってみたら」というアドバイスは、黒木先生の『日本人とは』の講義に相通ずるものがありました。黒木先生は、「心のゆとり、つまりリラックスしなければいくら頑張っても仕方がない」と話されていました。

私はこのセミナーに参加して初めて「ライラ」の意味を知ったのですが、重要なことは青少年指導者としてどうあるべきかというよりも、むしろ人間としてまたは日本人としてどうあるべきかということだと思います。従って、黒木先生が話されていた、現代の我々が見失ってしまった、未来から過去への時の流れ（カイロス）、つまり人生のチャンスをどう受けとめるかということが最も大切であると思います。

このセミナーで得たものがもうすでにプラスとなって私に返ってきていることを非常にうれしく思います。そして参加させていただいたことを深く感謝いたします。



森 千 恵 子

RYLAセミナーの三泊四日で、学生から社会人までの幅広い相で、色々な人達の今、考えている事、感じている事を、グループで話し合ったことは、とても良い経験となりました。この世の中に全く自分と同じ人間なんて存在しないし、常日頃私は、自分と同じ価値観を持つ人達と傍にいて、色々相談したり、助けてもらったりしています。ですが社会には、自分とは違う価値感を持った人も居る訳ですから、その人達と、どのように接したらいいのか、そのような気がします。私には、その答えが難しくて見つかりません。今回、セミナーのグループとなった人達と、三泊四日間共にし

て、四日間だけではどういう人なのか、本当のところで何も分からぬと思ひますが、価値感が似ている人達が何人か居たようなグループだったと、私は思いました。今回、このような企画を作つて下さった R Y L A セミナー運営委員会の方々とこのセミナーで知り合つた人達に、感謝します。どうもありがとうございました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

沢 田 郁

「カウンセラーになってほしい」という依頼を受け、お引受けすることはしましたのですが、この任務を持ちまして小豆島へ出かけますことは、大変気の重いことではございました。子供を育てた経験さえもありません私に、いったい何が出来るのであろうか、と不安が頭をかすめてまいります。カウンセラーとしての経験も能力も無いものなら、せめて、彼等に真剣に接してやることが、自分の出来る最大のことではないか、と考えました。

1つ。若人達が何かを話してみたいと思ったときに、気楽に語りかけてくれる雰囲気をつくっておこう。

2つ。いつも心を彼等の心の上に置き、一人一人の心をジッとみつめておいてやろう。

こちらからアレコレ積極的に語りかけずとも、心をみつめてやっていたならば、彼等が何かを思つてゐること、何かを言つてみたいこと、それが伝わってくるのではないかだろうか、そして、私の意見を望まれ求められたなら、そのときに、何かは彼等の役に立つてやることもできるかもしれない。それが私に出来る全てのことのように思われました。

ほんの4日間、ほんの小さな社会集団ではありましたのに、諸々の色々な事柄があり、目まぐるしく、もっと何か彼等にしてやることのできることがあるのかもしれない、と思いつつ迷いつつ、終わりの日の朝は訪れてきました。

一人一人の顔を見渡しつつ「かわいいなあ、この子達…」と思わず知らず思つておりましたとき、私は「ああ、これでよかったのかもしれない」と一人、自分の心の中

につぶやいておりました。

このセミナーでお目にかかるせて頂くことのできましたロータリーのお方々、ご令室様方、私は心から暖かく豊かな気分に浸らせて頂けましたことは、本当にうれしいものでございました。誠に有り難う存じました。この心のふれ合いを大切にさせて頂きます。



C グ ル ー プ



酒井明子

R. C. 事務局に勤務する私にとって、「RYLA」はロータリー活動の中で特に興味を持っているものの一つでした。

事実、その研修内容は、私の想像以上に密度の濃いものであり、また大きな感動と衝撃を与えて下さいました。そして、今までの自分が如何に小さな世界の中でしか生きていなかったか、ということを痛切に感じさせられました。

人生の中の3日間、本当に短い時間ですがこの一瞬を共有できた友を、私は決して忘れないでしょう。

「自分を飾らずに本音で語りあえる」社会人になって忘れていた熱いものを取り戻した様な…そんな満足感で一杯です。

—— Heart To Heart ——

友に学んだことは

「ハートでぶつかればハートに訴える。」

自分自身、一回り大きくなれた様な気がしています。

今、余島から戻り、セミナーに参加する以前と同じ生活が始まりました。環境は今までと変わらなくとも、私のHeartに感じるものは、微妙に違ってきている様に思えます。

これから先、もっとゆっくりと時間をかけて、自分をみつめ続けてゆきたい…

私に感動を与えて下さった

すべての人たちに………

そして、余島に………

ありがとう。



中村健

最後の余島からの渡し船で感じた思いは、さびしさだけであった。人との出逢いを決定つけるのに、3日という期間が十分であるか否か、無論、私には体験的にはっき

りと前者であったと思っている。なぜなら、エピローグの感傷は、それまでの過程の感動の結果だと思っているから。

今回のセミナー前、自己に対して与えた題

1. 日常生活の打破（社会へのリハビリ）
2. 人己形成の上で何かを見付ける。

もう一つあったが、忘れた事として、まあ難しい話は抜きにして、とにかく感動に飢えていた。（感動という言葉の意味は、初日の講義によってよくわかったが。）

終わってみて、一つ一つの出来事に対してより、3日間すべてに感動しているというか、頭の中がぼんやりしていて、夢を見ていたのではという錯覚がある。これは毎晩というよりも、終わって今日3日たっても酒を飲んでいる私が単にアル中なのかもしれない。

そういうば、もう一つ、人に見えない物が見えるようになった。時間の神で、チャンスをもたらす“カイロス”である。それがいつ来るのかはわからないが、どんなやつなのかは知ってしまった。C班の人なら見た事があるはずだが、多分、私はそのカイロスの実像を見た最初の人間ではなかったろうか。そしてカイロスの絵を見てくれた人も、カイロスだったかもしれない。

さて、アル中のモノローグはこれで終わりにしよう。

余島で出逢ったみなさん、本当にありがとうございました。再会を楽しみに、みなさんの未来に、そして自分の未来に期待して。



小林利高

4/2～4/5の三泊四日は、本当にあっという間に過ぎてしまった気がします。時間的にはとても短い期間でしたが、ここで出会った仲間とは、もう何年もつきあっているような、そんな連帯感を持つことができました。私達は日常、妙なテレがあって、人と真剣に話をするということは避けてしまっています。そんな私達に、真剣に人の話を聞き、自分の意見を述べる機会を与えてくれた今回のRYLAセミナーは、とても貴

重な体験となりました。欲を言えば、カウンセラーの方の誘導なしにそういう話合いができたなら、もっと良かったのにと思います。あともう1つ、キャビンタイムに熱中するがために、睡眠不足となり、せっかくの奈良先生、今井先生のお話を全ては聞けなかった（半分居眠りしてました）ことが大変残念に思っています。RYLAでの生活は、自分にとってはなじみのない体験の連続で、今にして思えば、ああしておけばもっと良かったのにと思えることばかりですが、天気にも恵まれ、すばらしい自然の中で短期間の間に多くの仲間を得られたことを、運営委員会の皆様に感謝しております。ありがとうございました。



上田昭博

最初ロータリーの人からライラセミナーを3泊4日間ある旅行みたいな感じで説明され、僕は旅行気分で参加しました。所が山と海に囲まれ何もない所で、研修に相応しい所だと思いました。そのため友達とのコミュニケーションも良くとれて、色々と話をして勉強になりました。奉仕の精神とか、心とか、色々とためになる話を聞きましたが、人間なかなか人のために、努力はしにくいと思います。僕らはまだ若いので、色々と良い人達に巡り合い、話を聞いたりして、精神を磨き、福祉のなんたるかを勉強したいと思います。僕にとってこのセミナーは、初めての事で、色々と戸惑いもありましたが、少しあわかったような気がします。これから生きて行く上で講師の方々から学んだ話や、友達から聞いた話を思い出しながら、前進して行きたいと思います。初めは参加することに気乗りがしてませんでしたが、本当に参加をしてみて、よかったですと思います。これからも、こういうセミナーを設けて、色々な若者を、参加させて下さい。本当にありがとうございました。



原田泰三

自分にとってすごくプラスになる出会いだった。と今、心から強く思う。

たった3泊4日の短い間だったけど、お互いが内面をさらけ出して心の奥の想いを語ることができた。最高やね!!



太田孝規

僕は、この「RYLAセミナー」とは、どんなものか、全く知りませんでした。

僕が、このセミナーに行ったきっかけは、会社の部長が、こういったセミナーがあるから行ってみないかと言われて、それじゃ行ってみようかという軽い気持ちで行きました。

余島に行き、初めて顔を会わし、全く知らない人たちと3泊4日も、どうやって協同生活をするのだろうととても不安な気持ちでした。でも、ついてみると、みんなとても明るく接してくれたので、気が少しだらくになりました。

最初の1日目は、開校式から始まり、夜はキャビンタイムだった。第1日目のキャビンタイムは、非常に、かた苦しい話でした。

2日目の講義は、「日本人とは」という課題の講義だった。その講習の中で、存在感という言葉があった。「存在感」とは、何かをしている。がんばる→よい結果、結果重視、人間の存在感。結果が悪い→存在感→④、何かをする→「体験」→感動→「知恵」、知識→納得、人生だから～なんだ。知識と知恵は反比例だという言葉が一番印象に残った。知識だけでは人間はダメだと思う。人間は、知識と知恵がそろった人間はすごいと思う。

3日目のバズセッションの中で「青少年指導者のありかた」とは、という課題の中で、僕らの班の意見は、自主性を持たせることのできる者、相手にむりやり押しつけない。共感する感性を持つ者、最後に情熱と感動という意味が出ました。

フォーラムでは、一つの課題について、みんなが考える。みんな自分の考えをしっかり持っていて、とても個性的ですごいと思いました。このセミナーで学んだことは、

これから的人生に、非常に役立つと思います。是非、もう一度このセミナーに参加したいです。



古賀真樹子

私はこのRYLAセミナーで、すばらしい出会い、本物の友情と信頼を知ることができました。また、国際的、地球的な大きな視野を教えていただき、感動と意欲に満ちあふれ、帰ってきました。本当に参加できたことを、うれしく思います。

思索の時間や、レクリエーションの時間、キャンプファイヤーやフォーラム、どれをとっても私にとっては「自分探し」のできる大切な時間でした。また、キャビンタイムでは、嘉納さんと井奥さんというすばらしいカウンセラーの元で、私の胸に3年間わだかまりとなっていた友人の死についてすべて話すことができ、たくさん泣いてしまいたいへんなご迷惑をおかけしたことだと思いますが、今はとてもすっきりした様な気がします。その上、3人の先生の講義や、班の仲間の話を聞き、自分がとても小さく思えました。特に最終日の今井先生のお話を聞いて、これからは私達がこの地球を背負っていかなければならない事、そのためには大人も子供も、みんな手をつなぎ協力していかなければならないことを、しっかり頭に焼きつけることができました。私1人の小さな悩みを解決し、喜んでいる場合ではないと思いました。私にはもっと深く考えなければならない大きな問題が、たくさんあると思いました。またそれが、私1人でなく、すばらしい仲間と共に考えることができる事を、うれしく思います。

本当に大切な時を与えて下さってありがとうございました。カイロスの前髪をうまくつかめた様な気分です。この事をできるだけたくさん的人に教えてあげたいと思います。



杉本英子

このライラ研修に参加しての一番のメリットは、様々な仕事や活動をしている方に触れて、身のある話を拝聴することができたということです。しっかりとした考え方や信念を持っている人たちを見て、“奉仕”に対する考えを新たにすることができる、自分の確固とした目標に向かって一生懸命するということはどれほどその人を輝かせることができるかを知りました。私はローターアクトクラブに所属しているのですが、幹事という役職についた今となってようやく、ローターアクトクラブの意味や魅力が分かりはじめた程度で、他の人たちの奉仕や社会活動に対する情熱に比べると、私のそれは本当に微々たるもので恥ずかしく思いました。そして、これからは今まで以上にがんばろう、とも思わせてくれました。せっかくローターアクトクラブに入り、個人ではやりたくてもできないことも、一つのグループとして社会に貢献できるのだから、こういうチャンスを逃したくないです。

奉仕なんて自己満足だ、という人もいます。よく考えたことはありませんが、たとえそうでも自分にできることを一生懸命する方が人間らしいことだと信じます。

先生方の講義を拝聴し、人間らしさやこれから私たち青少年の役割といったものを改めて認識することができました。また、全く境遇の違う仲間たちとふれ合い、同じような目的を見いだして、素晴らしい人間関係を築くことができました。そして、青少年指導者のあり方について話し合い、将来教師を目指している私にとってはとても有益なものとなりました。短期間のうちに多大な影響を与えてくれたこのライラセミナーに参加することができ、本当に良かったと思っています。ありがとうございました。



橋本倫宜

たくさんの勉強とたくさんの友達ができて本当に良かったです。すごい感謝します。

このRYLAに来て一番学んだ事は、自分の足りない所、自分が目指す物、自分よ

りも優れている指導者たちetc…です。

ロータリークラブがすごいすてきなクラブというのも、いろんな人のお話から理解できました。

青い空、海、島の自然の中で、いろんな友達と遊び、自分がやっていけることを見付けました。本当に余島のキャンプは良かったです。最高の思い出と、出会ったみんなに対して感謝の心で一杯でした。本当にありがとうございました。そして学んだいろいろな事を実施して次の世代に伝えます。



小野恒生

自分のこころの中に、実に新鮮で、貴重な思い出が刻み込まれました。それは今までありませんが余島での4日間の体験です。

4日間という短い時間ではありましたが、そのときの流れの中にはいろんなものが凝縮されていました。

豊かな自然とふれあえたこと。

いろんな思いをもった魅力ある人たちに会えたこと。

それぞれの悩み、思いをお互いに語りあえたこと。

自分に素直になれたこと。

自分自身を改めてみつめ直すことができたこと。

などなどいろんな出会いや体験がその中にあり、これらすべてはこれからの自分にとってかけがえのない経験となるだろうと今、実感しています。

このような機会をあたえてくださった方々に深く感謝申し上げ、また、余島でしりあえた仲間たちに必ずいつかどこかで再会できることを願います。きっといつか…。

以上



勝 又 裕 子

この度のRYLAセミナーの帰り道に、私は、久しぶりにゆっくりとした落ち着いた気分でいる自分に気が付きました。静かな感動とでも言えるでしょうか。3泊4日は内容の濃い、実り多き時間になったと思っています。

私は現在学生であり、下宿生活をしていることもあります、普段の生活は学校の中に限った人間関係ばかりになります。医学部という学部の性格上、本来は「人」がどうあるべきかを一番に考えていかなければいけない立場にいるのにも関わらず、莫大な量の勉強に追われ、いつの間にか、目の前に重なる仕事を無機的に片付けていくだけの自分になってしまっていた気がします。

RYLAセミナーでは、ここへ来なければ会うこともなかっただろうすばらしい人達に出会えました。講義をして下さった先生やロータリアンの先生方、カウンセラーの皆さん、そして研修生それぞれから、いろいろな意味で影響を受けました。

ロータークトクラブに所属して2年になりますが、ロータリーとの交流はほとんどなかったので、ロータリーの精神を学んだのは今回のセミナーが初めてだったような気がします。この感動をこれからできるだけ仲間に伝えていきたいと思っています。

C班で共に過ごした仲間とは、これからもつき合いを続けていきたいと考えています。今回は同年代から父親の年代の方まで集まった班となり、面白い話ができたと思います。同年代であっても、進む道は様々で、いろいろな考え方を知ることができました。

また、カウンセラーの方には、親のような目で、また仲間としての目で接していたとき学ぶところも多かったと思います。

今後、RYLAセミナーへぜひ行くように、後輩達に伝えていきたいと考えています。



私がここにきて一番良かったことは、人に知り合えたことです。

それは、人と話すことにより、今まで見えていなかった自分が見え、他人からの自

分など、いろいろな自分を発見できたことです。

人に会うことより、教えられたり、学んで行くということが、とても大事なのだと、そして自分が人に話すときも、人に影響を与えてるのだということを実感しました。

たくさんの講義がありましたが、それは、きっかけに過ぎなく、そこから何を感じて、生かして行くかは、これからの自分次第だと思いました。

このような機会を設けてくれたライラの皆様やロータリアンの皆様に感謝いたします。



渡 部 敬 子

興奮状態が続いた帰り道、私は早速トフラー著書の「第三の波」を手にとりました。時代についていや文明について、とっても面白く感じることができました。それは、RYLAが終わって視野がかなり広くなったからではないでしょうか。興味のなかった分野にまで眼を向けさせていただき、つくづく余島に行って良かったなと思っています。RYLAには、異質の感性を持ったエネルギーッシュな人たちがたくさん集まっていました。このような人々との出会いによって豊かな人間関係が生まれ、そこには豊かな人間性が育つことでしょう。きっと神様・カイロスが与えてくれたものなのでしょう。そして、今まで見逃していたことを自分なりにしっかりと受け留めることができることでしょう。「自分を研ぎ、何か社会の役に立ちたい」そんな思いでいっぱいです。そして、地域から世界へ、真理を追求していきたいと思います。来年も二十一世紀を支える若者が参加して、多くの発見と刺激を受けて欲しいと思います。どうもありがとうございました。

春風や 闘志いだきて 丘に立つ

虚子より

D グ ル ー プ



高 橋 聰

仕事の関係上、教育委員会にいるため、このようなセミナーを企画したり運営したりする側にいることが多いし、また参加するのも好きなので、雰囲気はだいたいわかっているつもりで参加しました。でもこういった主旨のセミナーはいつも新鮮で、同世代の全く違った場所に住んで、自分と違った経験を持って、違った興味を持って、違った考え方を持って……という人たちと出会えることは自分の人生を厚みのあるものにするために一番優れた方法だと思います。

自分の生き方に対して真剣な人は、日々そういうことに対する喜びを持って生きているのですが、そうでない人、それに気付いていない人がいることも事実だと思います。

講義の中で、知恵は鍵である、という話がありましたが、青少年においてはこの鍵を自分の持っている道具で作り上げていく姿勢が自分の生き方に対する真剣さを表していると思います。いろんな形の鍵があって鍵穴もいろんな形のものがあります。全てに通じるマスターキーは神様しか持っていないません。しかし、私たちは自分に対する真剣さを持って、神からこの鍵を借りることができます。そこで学んだ鍵の刻み具合を自分の鍵と比べて限りなくマスターキーに近くすることも可能だと思います。

新しい友に出会うたびに表現の違いはあっても「全体」に近づけるような気がします。人は集団になると狂気に走るけれども、よくなっていくのは一人ずつでしかない、という歌詞がありますが、全ての人が人との、そして出来事との出会いの大切さを感じすれば、集団がひとつのマスターキーを共有することもできると思います。そういう意味で、意義ある4日間でした。



矢 野 敬 子

青い海と緑にかこまれた余島での生活、その日に会うのが初めての人達の中で4日間ともに過ごし、出会いの大切さを実感しました。

一番心に残っているキャビンタイムでは、自己紹介から始まりました。それぞれの

個性が飛び交う中で一人一人がお互いの正直な気持ちを話し、こんなことを話せる人達っていいなと思いました。そして、1日1日皆の心が打ちとけていくのが、会話や態度からもわかりました。先生方のお話にもあったように、今という時間は1回しかない、自分の心に正直に生きる、相手がどう思おうと、自分の力を出すという言葉が頭をよぎりました。

あと、行事の中に、バズセッションという名前の話合いがあり、最初、聞きなれない言葉だなと思いましたが、意味を聞き納得しました。そのとおり、蜂がブンブンしている羽の音のようにお互いの話を盛りあげていき、その意見を小さい場所からだんだん大きな場所へと、それぞれの意見交換をしていくというものでした。

今、新居浜に帰ってきて思うのは、4日間本当に貴重な体験をさせていただいたRYLAに感謝したいです。こういった経験は、なかなかできるものではありません。このセミナーで、出会った人達、そして、自然によって自分自身少し成長したような気がします。

いつまでも、このセミナーで感じたことを忘れずにいたいと思います。本当にありがとうございました。



中 西 紀 子

「よかった」の一言です。先生からプログラムの紙をもらい、はっきり言ってレクリエーションやキャンプファイヤーの文字にひかれてこのセミナーに参加したのです。でも不安な事が一つありました。それは友達が出来るかということでした。

しかし、その不安も初日から消えました。同じキャビンの子とすぐに友達になれ、班ごとのキャビンタイムは日を増すごとに楽しくなりました。人前で自分の意見を言ったりするのが苦手な私にとって初めのうちは少し苦痛でした。でも三日目のキャビンタイムは、次の日まで続くほどの盛り上がりを見せました。多くの人のいろいろな意見を聞くことができて日頃ではできない体験をしました。そして自分をもう一度振り返ることができました。

3日間の午前中の講演でもとてもいい話を聞く事ができました。

自然の中で、ふだんは見れない自分を見つめる事ができたと思います。思索の時間でもいつもはだれかといっしょに行動しているが、一人だけで自分を考えるという時間で初めは淋しく、とても不安でした。しかし時間がたつにつれ一人で考える時間も人間には必要なのだなあとと思いました。

私はローターアクトクラブに所属しているのになぜ青少年指導者の事などについて考えなくっちゃいけないのかと疑問をいだいた時もありました。しかし、これからの社会、もう少ししたら私たちがリーダーとして活動していかなくっちゃいけないし、自分が親になった時の子供の指導にもとても役に立つ事だなあと想い、最初の自分をはずかしく思いました。今回本当に参加してよかったです。今後の自分にいかしていきたいです。短い四日間だったけど自分自身大きくなったなあと感じています。



横山栄治

私は、今回RYLAという言葉はもちろん、ロータリークラブについてもほとんど予備知識のないまま、第14回RYLAセミナーへ参加することになりました。従って、余島へ上陸当初、このセミナーに対して何を期待していたというわけではなく、セミナーの開催期間の4日間がずいぶん長く感じるだろうと思っていました。しかし、仲間にめぐまれたのと、このセミナーの内容が、興味を持つのに十分だったため、最終日に閉校した時点で、もう終わったのかと少し残念に思いました。

4日間のRYLAセミナーで得られたものは、講義による知識の修得と色々な考えを持った人達との出会いであると言えるでしょう。特に、普段生活している環境が極く一部の考え方で限られていた私には、まったく初めて会った人達の経験や考えに一部分といえども触れられたことが、実に新鮮でした。

このセミナーでの他の参加者と出会うことによって、少しだけですが視野が広くなつたように感じ、自分と異なる考え方をする人をある程度受け入れができるようになったのではないかと思います。

また、今後も生きていくうえでこのセミナーで感じたことを生かしていくべどんなんに人生が楽しくなるだろうと思いました。

最後に、RYLAセミナーの関係者の方々、参加者、特にD班の方々、そして、私にこのセミナーへ参加するよう推薦していただいた高知東ロータリークラブの方々に深く感謝したいと思います。



大 西 忍

知らない土地へ一人で行くという不安を覚えつつこのセミナーに参加しました。ここで出会った人はみんな初対面の人ばかり、どうなるのだろうという不安半分、いろんな人に出会えるという期待半分のうちに始まりました。どの内容もひきいれられるものがありました。

講義では、人間とは、生き方とはと問いかけているようで、一人一人の悩みに答えてくれているようでした。その中でも、だから～なんだでは納得できるものではなく～にもかかわらずおこる事に感動、覚えるようにということと、どんなことでもプラスの状態にかえてみるよう視点をかえてみようということが、印象に残りました。思索の時間、一人で何を考えよう、一時間もどうしようと思いつつ、ぶらぶら歩き回りました。一人でいることの不安から、友達のいることの大切さを実感させられました。3日目のバズセッション、フォーラム、D班のみんなの考え、力が総集されたものだと思います。みんなでもりあげようと、いろいろ企画、自分の言いたいことや考えをぶつけあうことの大切さを知りました。このセミナーの中で、一番心に残ったのは、キャビンタイムです。日がたつにつれてこの時間が一番楽しみの時間となり、時間ものびて、最後の日は徹夜でした。一つのテーマについて自分の好きなように話しました。うまく話せなくとも、どんなばかみたいなことでも、みんな真剣になって聞いてくれました。また、いろいろなことを聞かせてもらいました。D班のみんなのやさしさを感じて、みんなに本当に心からありがとうございます。

この4日間、なにもかもが不安の中から本当に自分にとって大切なのを見つけた

ような気がします。D班のみなさん、また淡路島で、お会いできることを楽しみにしています。



森 本 晋 平

私は今までこの様な活動に参加したことは一度もありませんでしたし、このような活動をつまらないもの、というふうに考えていました。だからこの活動に参加したのもただ単に無料で小豆島に行けるからという不純なものでした。初めにみんなの自己紹介の時、みんながあまりにも難しい事をおっしゃった為はっきり言って大変な所にやってきてしまったなと思いました。ところが自己紹介が終わってただの雑談の時になるとみんな私と同じような感じになり、にっこり笑って楽しそうな話をしていました。その時私は自分の忘れていた一番大切な物“真剣さ”というものを思い出しました。私は今まで人に本当に真剣に夢中に語りかけるということを、何か照れくさく、こっぱずかしい物という様に考えていました。ところがRYLAに参加してみて、自分が真剣になって考えてみて、人に話せば、その人も真剣になってその考えに意見し、反論し、またアドバイスをしてくれるという事がわかりました。

その為色々な人生の先輩の話にも耳をかたむけることができ、そして色々と新しい発見を見い出す事ができました。

また、私の最高の楽しみの時間であるキャビンタイムでは、初めみんな初対面という事もあってか長く沈黙が続くということもありましたが、カウンセラーの小池さん、菊沢さんなどのおかげで、最後の日はみんな完全に友達という感じで笑いあったり、夢中で話し、それを夢中で聞き、真剣に考え、時には涙を流してみんなで語り合いました。

最後の閉校式の際、ディーンの菊沢さんの涙を見て、この人たちは私たちの為にこのRYLAを催し、私たちの為に考え、なやんでくださった事がわかりました。

最後に50年後このRYLAに参加したことを思い出し、それが自分の分岐点になったと思えるようこれから真剣に生きていきたい。

坂 本 豊 子

本当にRYLAに参加できてよかったです。たまたま日があいていたというだけの理由で何となく参加することになった私はRYLAの要項を見ておどろきました。毎日午前中になんともむつかしいテーマの講演があり、青少年指導者の養成についてむつかしく書いてあるしで軽く小豆島に3泊4日も遊びにいけると考えていた私はすっかりいきたくなっていました。しかし4日間もなどと思っていたのがうそのように、あっという間に過ぎてしまいました。

RYLAに参加して一番よかったですは、いろいろな立場の人の話が聞けたことです。私のまわりには同じくらいの年齢の人や、同じことをしている人はたくさんいます。この人たちと話をするのも得ることもありますが、やはり話題はかたよってしまいます。しかしキャビンタイムでビールを片手にとりとめなく話をしているただそれだけでも私にとっておおげさですが世の中にはいろいろな人がいるのだなあと考えさせられました。そしてもっと視野を広げていきたいと思いました。

RYLAのプログラムは本当によくできていたと思います。2日目のレクリエーションで仲良くなり3日目のバズセッションでさらに仲良くなれたと思います。そして忘れられないのが講演です。今まで考えもしなかった考えをあたえられ、今はまだ自分にどう影響したかわかりませんが、とても感心させられました。私にはRYLAのねらい通りの何らかの影響があったと思います。

本当に4日間はあっという間でした。青少年指導についてさらに考えてこれからリーダー活動を続けていきたいと思います。カウンセラーの小池さん、菊沢さんそしてD班のみなさん本当に楽しかったです。ありがとうございました。また会える日を楽しみにしています。



東 村 利 広

講義について、指導者という範囲を越え、人間としての生き方に関して大いに参考になった。「技術的には一人前の指導者と見なして」という断りもあったが、未熟な

私としては、もう少し具体的な内容を期待していた。

フォーラムについては、やや固い雰囲気の中で始まり、若い人の意見をもっと聞きたかったが、余り出なかったのが残念だった。テーマが少し大きすぎたのではないかと思った。青年或いは少年と限定してもよかったですのではないかと思った。

キャビンタイムは、楽しく自由な雰囲気で色々な話が出て、私だけでなく参加した者のほとんどが一番印象に残ったのではないかと思う。また、その雰囲気を盛り上げるため、色々と気を使い金を使い、最後まで寝ないで（私は寝てしまったので、後で聞いたのだが）付き合った下さった、カウンセラーの方々のご苦労には、感謝し感心させられた。まさに、青少年指導者のあるべき姿ではないかと思う。

フェリーに乗船する時には「ながいなぁ」と思っていた3泊4日の研修も、美しい余島の自然の中であっという間に過ぎてしまったというのが今の実感である。

この研修実施のため何ヶ月も前から準備して下さった、ガバナーをはじめスタッフの方々に感謝致します。ありがとうございました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

松浦里弥

今回のこのRYLAセミナーに参加させていただき多くのことを学ぶことができました。

スケジュールの中の3つの講演会では、それぞれのテーマで今の自分自身について考える機会を与えていただきました。

またRYLAセミナーに参加し一番自分に影響を与えてくれたのは、多くの人々との出会いでした。今まで何度かこのように知らない人たちで集まりグループをつくって行われるキャンプや研修会に参加しましたが、このセミナーのように多くの強い影響を私に与えてくれたものはありませんでした。

出会う人々それが今の私自身に刺激をもたらし何かを与えてくれたように思います。特に班の人々はいろんな人々が集まり、仲間を一人ひとり少しづつ知っていくたびに、その人の持つ考え方や、其感を覚えました。年令を超えた人々との出

会いが「人」というものを改めて感じさせてくれたように思います。また、新しい出会いの中でそれぞれの人々と出会うたびに今の自分自身を見つめることができました。今さらながら自分自身が気づかなかった部分を発見したセミナーでした。

この3泊4日の間に得たものは数多くありました。それをすべて自分に吸収できたかどうかはわかりませんが、これから的生活の中でそれらを少しづつ自分のものとしていく努力をしたいと思っています。

このRYLAセミナーで出会ったすべての人々に感謝します。このようなセミナーがいつまでも続くことを心から願っています。

みなさん本当におつかれ様でした。ありがとうございました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

石津友子

今回RYLAのお話があるまで私はロータリーのことを何も知らなかったのですが、このセミナーに参加することができてとても嬉しく思っています。

私は常々、多くの人々との出会いの中で自己を磨いていきたいと思っていました。このRYLAで色々な人の話を聞き考え方を知ったことで視野が広がり、また、自己を見詰め直すあらたなきっかけになりました。

4日間という短い期間ではありましたが、こんなにも自分の思いを話せる仲間ができたこと、私の人生でまたとない出会いであったと思います。この出会いで私自身に少しでも吸収されたものがあれば、私の中にこれからもRYLAが生き続けると信じています。

今—RYLAで出会った全ての人々に、感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

片川理恵

RYLAセミナーとは何か分からぬまま、私は船に乗り込んでいました。そんな私に、ロータリアンの方が

「多くの人から『モノの見方』を学んで帰りなさい。」とおっしゃり、私は『モノの見方』を自分のキーワードとして、様々な人と接してみようと思い余島に到着しました。

バズセッションの時、私は4人で『青少年指導者のるべき姿』のテーマの基に話し合っていましたが、話し合う程まとまらず、終いには沈黙が続いていました。そんな時、バズセッション中にもかかわらず誰かがジュースを買って来てくれました。4人に渡された1本のジュース。そこから、あの『紙コップ』の話が生まれました。『紙コップ』は、皆の何気ないやりとりの中での出来事です。もし気にもとめなければ、紙コップを作ってジュースを飲んだという単なる思い出話に終わっていたことでしょう。

私は『紙コップ』の話をした時、学ぶべきモノは今、こんなにも身近な所に存在しているのだということに気付きました。

思索タイムで登山をした時、私は目的地に着くことばかり考えて歩いていると、この道は確かに目的地まで続いているのかという不安が募り、道中の自然の息吹を感じる余裕が持てませんでした。しかし『モノの見方』を変え、今の登る過程を味わいながら歩こうと考え直すと、楽しくなり小さな花にも目を向け自然と共に存することができました。

同様に人生も後悔と未来との不安の時間=クロノスの中で生きるのではなく、『モノの見方』を変え、与えられた現在の環境の中で今をどう生きるのかということが大切だと思いました。

学ぶべきモノは、今にあると思います。このセミナーで、班の仲間やカウンセラーの方ロータリアンの方々に刺激を受け『モノの見方』を学びました。ありがとうございました。

葛 西 雅 美

数時間前に研修を終えたばかりの今、まだ、感動と興奮の気持ちでいっぱいです。

私は、現在ローターアクトクラブに入り活動をしているわけですが、ただ何となくやっているだけでした。何のためにとかあまり考えたことなどありませんでした。しかし、このセミナーに参加し、本当に沢山の人と出会い、沢山の人の考えを聞き、そして沢山のものを得ました。普段の生活では、決して考えないような事をごく当たり前のように考えられ、そして自分の考えとして他の人に言うこともできました。

“人の出会い”とは、何気ない言葉であるけれど、現代の個人主義社会で、人と出会うことは本当に大切なことだと思います。このライラで出会った人々の前で、私は“自分らしさ”というものが出来ました。こんな人達にめぐり会えて本当に幸せです。

まだ青少年である私が、青少年を指導するなど……と初めは思っていました。しかし、ライラを終えた今、私は以前とは違う何か新しい気持ちが芽生えた気がします。

将来、私はどのような道に進んでいるかまだわかりません。しかし、どの道においても、このライラセミナーで学んだことを糧としていきたいと思います。そして、ライラでの出会いを一生の宝にし、生きていきたいと思っています。



小 池 弘 三

余島に来るたび、本当に来て良かったなーと思います。今回、カウンセラーとして研修に参加させてもらい、生きるということは苦しいけど素晴らしいことなどと実感することが出来ました。縁あって共に過ごしたD班のみんなや、あまり話をすることがなかったけれど、D班のみんなと同じように懸命に生きている他の班の受講生のみなさん、菊沢ディーン夫妻をはじめカウンセラーと裏方をつとめていただいたロータリアンの方々。そして、心に残る数々のお話をしてくださいました講師の先生方とパストガバナーたち。この出会いの尊さを、余島だけでなく、今私たちが生きているところで感じられるようになれたらと思います。ありがとうございました。

菊澤重子

第14回ライラセミナーに私は最高年令の初のカウンセラーとして緊張と不安をいただきながら、まぼろしの島、余島へと向かう。

心配していた雨も上がり3分咲きにはころんだ桜の門をくぐりインフォメーションセンターに集合し、まずカウンセラーミーティングを開き、初めてカウンセラーとしての重責を感じました。

その後キャビンに入り、リーダー達との初顔合わせ、自己紹介となり、みんなの顔が明るくいきいきと、やさしいまなざしなので、私の不安は薄らぎを感じ、寝食を共にする事により、だんだんリーダー達の緊張感も柔らぎお互いに胸を開き、色々な話や歌も出るようになりました。

午前中の講義の黒木先生、奈良先生、今井先生の講義は21世紀をになうリーダー達にとって「今、何かをやらねば」という感動を与えた事でしょう。また、思索タイム「人生を考える」は、余島の大自然の恩恵に抱かれ自然と手を合わせ、万物の思いに感謝の出来た時間でした。三日目、バズセッションの結果を深川先生のフォーラムで聞き、今回受講したリーダー達は地域社会に帰ればきっと良き灯をともしてくれるものと確信致しています。三泊四日アッという間の時間でしたが多くの友と出会い心を求め心を磨き合えたのではないでしょうか。

三分咲きの桜も満開となり、まるでリーダーとカウンセラー・ロータリアンの心の内と同じ様に充実感に胸をふくらませながらお互いに堅い握手をして、また再会出来る事を念じながら余島を去りました。

最後に、人と出会い・神と交わり・愛の火のもえるところというお言葉は余島のライラセミナーそのものであると感銘致しました。

この縁をさづけて下さったガバナー及びロータリアンの方々に深く感謝申し上げます。

第14回 R Y L A 運営委員会

顧問 今井 鎮雄 (第2680地区パストカバナー 神戸西)

梶浦 暉一 (第2670地区パストガバナー 松山)

ディーン 菊沢 建明 (伊予)

副ディーン 安平和彦 (姫路)

R.I. 第2680地区

加藤 拓 (伊丹) 藤原慶弘 (姫路)

美田 和茂 (神戸東灘) 井奥寛泰 (姫路南)

糟谷 日出男 (神戸須磨北) 三木且視 (龍野)

上木 義信 (加古川) 中村英夫 (香住)

R.I. 第2670地区

伊藤 逸夫 (東予) 吉本 功 (高知東)

谷口修平 (松山西) 元広武志 (徳島北)

平地保治 (小豆島) 吉原哲男 (高松)

カウンセラー

吉田 映治 (徳島) 小池 弘三 (神戸須磨北RC)

安藝眞一 (高知東) 井奥寛泰 (姫路南RC)

菊澤重子 (伊予RC会員婦人) 水谷よし子 (神戸垂水RC会員婦人)

嘉納 洋 (神戸東RC会員婦人) 澤田かおる 郁 (姫路RC会員婦人)

あ　と　が　き

RYLA委員長 平 地 保 治
(小豆島RC)

人間と自然とが触れ合う場所、今年の4月2日から5日までの少年少女キャンプ、ライラセミナーがありました。

大きな変化の時代と言われる現代、私達もどのようにしていいか分からぬこともある。ロータリーが期待をしている青少年のことを考えた時、その人達のどんな考え方を基準にしたらよいか、この時代にいかなる夢を持つことにも難しいことがあるかもしれません。そんな中で、私達は真剣に次の時代をどんなものにするかということについて考え、まともにぶつかっていきたいという希望が2670・2680地区の合同によるライラセミナーありました。

過去、現在、未来

過去を考え、過去の歴史を振り返り、今を大切にし、21世紀に向かって愛を持って望む毎日の講義は、参加者に深い感銘と、今後大きな活躍を期待できると信じています。 ロータリアンと青年とが共に本当に真剣に一緒に考える。あるいは私達自身がある種の目的を持ってみいだし、このことのためにどうしたらいいかを考える場所としてのフォーラムで、一人一人の参加者の言葉はロータリアンにも深い感銘を与えた。 今、21世紀を迎える時に、一番大事なことは、真剣にどんな視野をもって考へるかということです。

このことを真正面にぶつかっていくため、今年は特にロータリアンの多くの参加をみ、3泊4日は私達にも実りあるものになったと感謝しております。

ライラ参加者の感想の大多数は、来てよかったです。あんな青年達を見つけた。すばらしい先輩と楽しく真剣に話し合うことができた。その喜びをもって帰られたことでしょう。

各地において、大きなリーダーとしての使命を果たしてくれることを私達ロータリアンは楽しみにしております。

2680地区ガバナー奥村孝氏、2670地区ガバナー井内堯治氏の情熱あふれるライラセ

ミナーに対するご協力に深く感謝致します。

人と出会い 神と交わり 愛の灯の 燃えるところ

この島でしか味わえない素晴らしい体験を大きな思い出として成長してくれることは間違ひありません。ロータリアンがいかに真剣に、また時間をかけ自己研修を積み、青年達の中に入ってゆかなければ彼らは感動をしなくかえってうるさく感じられるとさえあると思います。

2680深川PG、安平副ディーンをはじめ、このライラの立案・計画・交渉・実施と、すべてに亘り心血をそいでのご苦労に対し、只々感謝の他ございません。ありがとうございました。

来る年も、両地区共催のセミナーが今日から出発し、新しい世代の青年達に大きな役割を果たすことが、ロータリーについても大きな目的の一つであり、新しい出発を祈り、今年の事業に対し心から厚く御礼申し上げます。



平成4年4月2日～5日

主 催 R.I 第2670地区
R.I 第2680地区

RYLA運営委員会

開催地 西日本青少年野外活動センター
(神戸YMCA余島センター)